

『で？　このようなものでどうだ？』

ライオンは振り返った。

『つだあ？　こんな子供だましで通用するのかよ』

不満げなスラーがその背で、口を尖らせている。

すかさず手を休めてデミは顔を上げていた。

『だってぼく、まだ子供なんだもん！』

床へ投げ出されたデミの両足の間には、ホロスクリーンをディスプレイ代わりに立ち上げたカードパソコンが置かれている。

それらやり取りに挟まれサスもまた、催促されたとおりライオンをしげしげと眺めた。その顔色は、先ほど取った仮眠のせいかな、すっかり元通りだ。

『いや、こう、その、なんか違うの』

小首をかしげ鼻溜を揺らす。

『なら、こうだったか？』

煮え切らないサスを前に、ライオンは確かめた。やおらぼんやりその顔は曇り、再びすぐさまアルトのそれへ輪郭を変えてゆく。

『うーむう』

唸るサスが納得する様子はない。アゴをさすり、もったいぶるかのように鼻溜を振った。

『なんじゃ、ちと……、二枚目すぎんかの？』

『土台が良いのだ。仕方なかう』

しれつと返すライオンには迷いが無い。

そこヘスラーがまたもや割り込む。

『どう見ても、やつぱりこいつは安っぽかねーか』

思案、尽きないそのいでたちは、臨時収容船のホグスと同じグレーの軍服へ変わっていた。すぐさまサスはライオンから視線を逸らし、そんなスラーもまた上から下へと眺め回してゆく。

『仕方あるまい。さすがにホンモノの軍服を調達するには時間がなさ過ぎるんじや。ウチにあったのはそのレプリカだけでのう。まあ、お前さんは主要二十三種のエブランチルじや。そこで何とかカバーしてくれんかの』

『命がけで学芸会かよ』

了解しているとはいえ、心もとないことこのうえない。ならすかさず相手の手を入れて、隣でモディーは伸びあがった。

『社長、お似合いでやんす！』

瞬間、振り下ろされる、平手ではすまないスラーの肘鉄。強烈な一撃にモディーはそこへうずくまった。

『しゃ……、しゃちよお……』

と、絶妙なタイミングで姿を現したのは、トラだ。ここ砂漠港レンタルドックの一角、鎮座するスラーの霊枢船後部ハッチから、シワだらけの顔をのぞかせる。どつき漫才を繰り返すスラーとモディーへ声を張った。

『おい！ 本場にガスは抜き終わったんだろ！』

『くだいな、テラタン。ちゃんと冷却ガスは開放した。あんたらを氷付けにするつもりはねー』

振り返ってスラーは怒鳴り返し、猛然と霊枢船へ足を繰り出してゆく。

ならそれもまた在庫として店に余っていたものだった。見送りサスはライオンへ、アルトが好んで発注する作業着を手渡した。

『これでよからう』

受け取りライオンは、早速、腕を通してゆく。否や、その口を開いた。

『冗談。ボイスメッセンジャーに俺の代役が務まるかっての』

声はまさにアルトのそれだ。

『ほ！』

サスは目を丸くし、ライオンは、いやアルトはこうも続けてみせる。

『ただし俺は棺桶に入ったきりだ。話すつもりはないぜ。わかってんのか、じいさん？……で、どんなものだ、ご老体？』

『完璧じゃ』

愛嬌一杯、ウインクして返すサスはご満悦だ。見て取りライオンは、アルトを真似ていからせていた肩を落としていった。

『段取り通りなら、もぐりこんだその後は顔を変えて霊柩船で待機と言うことになっているが……』

新たな不安に言葉を濁らせる。

『いや、十分じゃ。恩に着る』

汲み取りサスが、きっぱり鼻溜を振ってみせた。ならその足元からデミの声は吹き上がってくる。

『出来た！』

様子はまるで、プラモデルの一つも完成させたような具合だ。そのまたぐらではち

ようと、一連の光学バーコードがホログラムディスプレイより排出されているところだった。待ちきれず手を添えすくい上げたデミは、サスとライオンの間に立ち上がる。

『えっと、コレ、葬儀社の新しいIDだよ！ 今からこの船はスラー葬儀社の霊柩船じゃなくて、フェルマータ葬儀社の船ね。で、おじいちゃんとぼくはその社員。こっちが、その腕章につけるID』

つながっていた光学バーコードを千切ってサスへ、手渡した。

『一応、どれも遅効性のウィルスを仕込んでおいたから、認識されても時間がたてば記録は消去されるようにしてるよ。けど急いで作ったから最初、ちゃんと認識してもらえるかどうかが一番の不安なんだけれど……』

『ま、その時はその時じやの』

受け取ってサスはあっけらかんと鼻溜を振り、左の腕に通していた腕章へ光学バーコードを滑り込ませる。つまるところその姿は、これからの役割に合わせて急遽あつらえた、喪服にも似たダークなツナギだ。デミもあり、同様のツナギに身を包むと自らの腕章へ光学バーコードを流し込んでいった。

『本当に大丈夫なのか？』

様子を眺めるライオンが、獣面へと顔を模してゆく。

『トラもおる。お前さんは無理せず、ラウア探しへ向かった時の入艦記録を抹消したスラーと霊枢船に隠れておればよい』

『しかし……』

『じゃあぼく、スラーおいちゃんにID渡して、船の分、書き換えてくるね』

腕章に光学バーコードが固定されたことを確認したデミが、ふたりの足元から駆け出してゆく。

『まかせたぞ。デミ』

サスは笑顔で送り出し、再びライオンと向かい合った。

『その心遣いは覚えておこう。何はともあれ、まずあの臨時收容船にF7とやらが実在しておらんと話にならんしの。経由して転送されておるのだから十中八九は間違いない、と睨んではおるが、なにせデータ上での話じや。コトが始まるとするなら、まあ、確認してからのことじやな』

ならライオンの目は動いて、デミとの距離を確認する。十分だと測ったところで瞳もろとも、声を絞った。

『ご老体、デミがついてゆくと言っておるのだぞ』

だがサスに同調する素振りはない。

『わかつとる。言つたところで聞くものでもあるまい。それはわしが一番よく知つておる』

笑みさえたたえてライオンへ深くうなずき返した。

『大丈夫じゃ。デミを危険な目にあわせるつもりはない。願わくば、デミにはわしの店をこれからも盛り上げてもらいたいからの』

一息つくつと、その目を宙へ持ち上げていった。

『厄介ごとは遅かれ早かれ、かいくぐらんとやつてはいけん商売じゃ。それもわしがおるうちにこなしておく方が、よからうて。ま、そこにアルトもおれば、ずいぶん助かるというものじゃがな』

果てない未来を臨んでたわませる。閉じて夢想し、開いてサスはこうもつけ加えてみせた。

『などと、あやつが続けたいというかどうかは、直接、聞いてみることには分らんことじゃ。そのためにも行かねばなるまいて』

にま、と繰り出された笑みに、向かうところ敵はない。見せつけられてライオンは、ただ肩をすくめて返していた。

などとその耳へは先ほどから、納棺スペースで繰り返されているトラとスラーのやり取りが響いている。いや、聞こえて仕方ないほどの大声は、のべつまくなしと続くケンカのせいだった。それもこれもスラーがトラの秘密を暴いて以来だ。そのうちモディーとトリオでコントでも始めそうなのだから、しかしながらある意味、息だけは合っていた。

そんなやりとりも一段落したあたりで、納棺スペースから敷かれたカタパルトの上を、チタン製の棺はふたりに押されて降りてくる。大きさは縦が二メートル強。横も一メートル余りか。大柄なテラタンでも、さらに体格のいい者でも入ることのできる特大サイズだった。

『使いたかあないが、F7つてやつの位置を探るためには必要になるだろうからな。パラシエント！ 中を改めておいてくれ』

スラーが呼びかける。

『わかった。今、行く！』

答えたライオンが、サスへ目配せを送っていた。合図にサスも、自船のコクピットへ体を傾ける。交差すればサスの手が、ねぎらうようにライオンの足を叩いてみせた。肘鉄を食らっていたモディーも頭をさすりつつ、ようやくそこから腰を上げる。

『モディーも手伝うでやんす』

右へ左へよろめきながら、サスを追いかけて走り出した。

つまり彼らの計画とは、こうなのだ。

揺れた、などと言う表現では生易しい。

たたき起こされ目を覚ます。

振動は船が格納庫の輪留めに乗り上げた衝撃によるもので、船底に近いせいだろう、衝撃が伝わりと同時に巨大な金属のぶつかり合う音もまた重苦しく耳に届いていた。

どうやら到着したらしい、と思う。

だがぴくりともしない腕は背後に固定されたままだった。見回しアルトは、体を揺する。狭い仮死強制ポッド内、やおら折り曲げることすらままならないヒザ頭に何かは当たって、目を凝らした。それが何なのか気づくまで、しばらくかかっている。どうやら連邦は『F7』までの道程、仮死強制のミストをケチってくれたらしい。同じポットにネオンもまた、向い合せと放り込まれているらしいことを見て取った。

そんなネオンはまだ眠ったままだ。いや正確には仮死状態のまま、といったほうが

いいだろう。同じ濃度のミストに浸されたせいで体重差分、状態が持続している様子だった。

おかげで身動きの取りづらさに輪はかかる。自然、舌打ちはもれ、おしてその中、アルトは取り急ぎスタンエアを確かめた。さすがの連邦も船賊がこんな置き土産を残してゆくなど、考えにも及ばなかったようだ。辛うじてベルトの間に引っかかっているスタンエアを、曲がらない腕と体で四苦八苦、アルトはベルトの間へしっかり押し込みなおす。

無論、振り回してここがどうにかなるような場所でないことは、百も承知しているつもりだ。だが、ただその機会が訪れたなら『アズウェル』での続きを再開するためにも、気取られるわけにはゆかないモノだった。もちろんそれはネオンにさえも、だ。なら待ち構える展開は、とたん心もとなさも総出でアルトを脅しにかかった。

相憐れむ。

追い討ちをかけて、これみよがしと吐きつけられたシャツフルの言葉が思い出される。

あの時、すぐにも言い返すことができなかった自分をアルトは、歯がゆく思い出していた。だとして口ごもったのは何も凶星だったからではない。彼らは間違っている。

だが違うと、否定できるだけの、分からせるだけの言葉を見つけられなかったのだ。

そもそも理解しあえぬ原因もそこにある。見知らぬ色をどれほど多くの言葉で語ったところで見えやしないように、味わったことのない感覚をどれほど言い聞かせてみたところで実感は生まれないように、伝えようとすればするほどすれ違い、分かり合えぬ事実だけが顕著となる虚しさは、聞き入れようとしない相手だからこそなお手に取るように想像できた。でないなら、彼らが何恐れることなくプロジェクトの正当性を口にすることなど、出来るはずもないと思う。

彼らは、その実を知らない。

結局のところ、どこでもかまわなかった目的地を地球に固定したのも、見下ろすこの頭を即座に吹き飛ばさなかったことも、そこに帰結している。自身にとつて、いや、おそらく誰にとつてもそれは残しておきたく、有しておきたい領域に違いないはずだった。つまり感情移入しているというのなら、確かにそれも然りである。だが思うままに行かない世界に苛立ち、不安を覚えている彼らもまた違う意味では、十分世界へ感情移入していた。

哀れんでいるのではない。

結論だけは、はつきりしていた。

大事なだけだ、とアルトは思う。

だからしてその領域を今でも、うろたえるほど守っておきたいと感じて止まなかった。はき違えた彼らの望みは阻止すべきだと、自らの事がごとく身につまされる。

すぐ真下では、乗り上げた輪留めに取り付けられたクランプが船底を挟み込む、寒気のような音を響かせていた。最後、ふるいにかけるかのごとく横揺れは襲い、クランプの音はやんで、船の駆動音もまた完全に止まってしまう。

静けさが、つかの間の休息が終わったことを告げていた。

聞こえたように、ネオンが息を吹き返す。膨れた背中がわずかアルトの視界へ入り、息が喉元へ吹きかけられていた。やがてうつむいていた頭をネオンは持ち上げてゆく。「だッ」

おかげで否応なく食らうアツパー。

「いったあ……」

ぶつけたネオンの弱々しい声もまた、遅れて聞こえた。ようやくそこで状況に気づいたらしい。

「何、アルト？ ど、どうなってるの。何、コレ？」

近さに驚いたらしい。今度は距離をとろうと身を丸めてくれる。そう、この狭い空

間で、だ。立て続けアルトの股間へ、そんなネオンのヒザ蹴りは飛んだ。

「お、まえッ……」

単純に絶句する。

「ご、ごめんっ！」

「もう少し、回り、見ろ、よッ」

「だって、見ようと思つたら。第一、予備麻酔の時は別々だったじゃない。あたしたち」
単価が違うことは日を見るより明らかだ。

「つそ、連邦の奴ら、ガスごとき、けちり、やがつて」

「ひどい、まだ縛られたままだし」

ネオンも違う意味でボヤク。可動範囲を探つて、芋虫のように動いてみせた。

「もう肩、限界よ」

「ああ、荷物扱いは、いただけないってこつたな」

「あら、やつとわかつてもらえた？ カーゴに吊るされたあたしの気持ち？」

切り返してネオンは投げるが、その不敵な響きは続かず、すぐにも不安へ沈み込む。

「ねえ、それより今、どこ？ あたしたちこれからどうなるの？」

無論、ネオンが気にしているのは、ポッドの外だけでない。植えつけたのが自分な

ら、アルトが一番よく理解していた。

「おとなしく寝かしつけられている間に、ついたらしいな。F7へ」

だからして少し的外れた答えで返す。

「あなたの言うとおりであったかも。聞かなきゃよかった。……どうする、つもり？」

「なに、が？」

だというのにネオンは単刀直入と問いただし、思わずはぐらかしてアルトは聞き返す。

「奴らに渡すくらいなら……。あなたはそこでやめたけど、あたしには聞こえた。そのつもりなんですよ？ そのつもりであたしを『フェイオン』へ呼んだんですよ？ それともまだどこか段取りが食い違ってる？」

どんな顔をしているのか、近すぎて言うネオンの顔を見ることは、かなわない。

「この船、軍の巡航艇よね。あのひとたちも軍服なんか着てた。F7って政府の機関？ 残しておいた想像力だって、これじゃ働くだけ無駄みたい。ただもう逆らえつこないってことだけがよく分かった。覚悟なんて決まらないけど……」

一息のんだその先が、詰まった距離以上、アルトへと押し迫る。

「ここから引つ張り出されたら、それはすぐ始まるの？」

つまり、殺すのかと問いかけていた。

「そんなこと」

言いかけてアルトは軌道修正するように、声のトーンを上げる。

「そんなこと、分かるかよ。こちとら同じだ。両手とも後ろへ回ってちゃムリな話さ」
聞いたネオンが真向かいで、ひとつクスリと笑ってみせていた。

「それってつまり、お手上げってこと？ 下がったきりなのにね」
なかなかうまく言い回しだと、ご満悦の様子だ。

「笑いこつちやない」

アルトは無然と突き返す。

「今のうちだもの」

笑いを引きずることなく、ネオンは言い切ってみせた。口調には妙な凄味があり、
押されてアルトこそ口ごもる。

「かも知れねーが……」

「理由は何？ あたしはどうして殺されなきゃならないの？ 覚えてないけれど、それほどヒドイことしてたのなら、今のうちに謝っておきたい」

だがそんな事実こそ欠片もない。だからしてやんわり、ネオンの抱く罪悪感だけを

否定してやることにする。

「大歓迎してる奴らだっている」

「出迎えご苦労、つて具合ではあるけれど」

「言ってやれよ」

「どうしてかな」

茶化せばむしろ、それはネオンを我に返らせていた。

「実感がないの。あなたがそんなことするように思えないし、こうして普通に話してる。きつとどこかで、助けてくれると思ってるみたい。おかしい話」

それきり、ネオンは逸れた話を戻そうとしなくなる。ただ疑問と不安にさえ疲れた様子でぼつり、こぼした。

「まだ眠る時間、少しくらいあるかな。仮死じゃなくて、眠りたい。そうしたらもう少し、ちゃんと怖くなれるかも。あなたを蹴飛ばして逃げ出せるようになるかも」

押しとどめる権利もなければ、ましてや答えられる立場でもないことだけは確かだろう。

「好きにしろよ」

せめて付き離せば、抗議の声は届いていた。

「でも、なんか臭う。服、ちゃんと着替えた？」

「そんなヒマあったか」

「寝てる間に、ヘンなことしないでよ」

「この状態でナニをどうやれてんだ」

と突如、外が騒がしくなる。不躰な足音が複数、近づいていた。立ち止まっただと同じ時に空気の入り込む鋭い音がし、ポッドのロックが解除されてゆく。まどろみかけていたネオンに緊張が舞い戻るのを、アルトは肌で感じ取っていた。様子に何遠慮するそぶりもなく、頭上でポッドは開かれてゆく。目の前からネオンの体が、吊り上げられて行く。そうして開けたアルトの視界へも、グロープをはめた無骨な分隊員の手はもぐりこんできた。胸倉を掴み上げる。ネオン同様、力づくで仮死ポッドから引きずり出されていった。

すでに巡航船の後部ハッチは開かれている。なだらかなスロープが格納庫とカーゴらしきこの空間をつなぎ、格納庫からの光は逆光となつてそんなカーゴ内へソリッドな影を落としていた。

『アーツエ』ならばどこへ行っても常備されている防砂壁がなかったせいだろう、おかげで薄っすら積もった砂塵が浮き上がるように照らし出されている。くりぬいて

無数に散らばる足跡は、先に船を降りた極Yたちの気配を残していた。証拠に、あの景気よくも騒々しい動話の気配はもう、感じ取ることが出来ない。

と、立ち上がったアルトの後ろ手を、変わらずフル装備の分隊員が無造作と押し出す。粗暴な扱いに腹立ち紛れ、アルトは分隊員を睨み返した。

『長い視察だったようですね、中尉』

その耳へ、声は飛び込んで来る。

『しばらく見ぬうちに、なんと小汚い』

懐かしくも知ったそれは続けさま、アルトへも投げかけられた。

アルトは捻じれていた背を、そんな声へほどいてゆく。そこに、突き刺すような足取りで近づいてくる影を見つけた。それだけで白衣へ沁み込んだ独特の薬品の臭いさえ蘇ってくるのだから、記憶というやつはおぞましい。着込み、神経質に吊りあがつた眉が、抱えた不満も変わりなしと互い違いと歪められている。ならそれは珍しくも有り難い、稀なる光景だった。今まさに駆けつけたといわんばかり息さえ弾ませクレツシエは、そこにいる。

見つけたシャツフルが、すぐさまアルトの死角より飛び出した。

『これは！ このような場所にまでご足労頂き恐縮です。つきましては詳細の報告と

共に、後ほど彼らの面通しをかねてこちらから参るつもりでおったのですが』

そこには、アルトにも聞いて取れるほどの言い訳がましさがあつた。おかげでまくし立てればまくし立てるほど、これがシャツフルのスタンドプレーであることをアルトにさえ露呈してゆく。ならばエブランチルであるクレツシエが、気づかぬハズもなかった。むしろそれ以上を読み取ると、汲んでねぎらう真似こそ嫌う。

『結構。あなたをアーツエへ行かせたのはわたくしです。あなたが自らの後ろめたさを気に病むことはありません』

一足飛びに結論だけを言い放った。

突きつけられてシャツフルが黙りこむ。

従えてクレツシエは、突き刺すようだった歩みを止めていた。目がアルトをとらえ、言葉もなくそこから剥ぐと、並ぶネオンへと向けた。

『わたしが造ったモノなどとは認めたくもない』

これでもかと思据えて言い放った。

思わずアルトが盗み見たネオンはそこで、覚えている限り初めて会うことになるクレツシエを何者かとうがり、見開いた両目で見つめ返している。そんな両者の間へ、多少なりとも挽回の余地を狙ってシャツフルは、再びもぐりこんでいた。

『滅菌作業はこれからで……』

『ウィルスカーテンで事足りるような汚れなら、あえて口外しません』

すぐさま指摘される見当はずれ。

確かにクレツシエのまとうコーティングの利いた白衣は、周囲の光を照り返しこそすれ、ウィルスの付着を感じしてにじむはずのシミをひとつたりとも浮かべていない。潔癖はラボに勤めるものならば最重要視される資質であり、比べて明らかに荒んだアルトたちの様子に先回りしたシャツフルの行動は、まったくもって裏目に出ていた。

『これはとんだ取り違えを』

まさに手足をもがれ、シャツフルは引き下がりがける。

『これよりプロジェクトを再開します』

それこそ早い、とクレツシエの激は飛んだ。

『平行して極Yの塩基付加を行います、現体制に問題があれば、中尉、現地点で報告を願います』

『も、問題はハブAIの自閉のみです』

シャツフルが慌てて返している。狼狽ぶりを示し、その顔をひとなでした。知ったことかとクレツシエの口調は、なおさら早まる。

『分かりました。中尉、あなたが思い通りにできるのはここまです。あなたはアルトを滅菌ゲルへ。その後、わたしの研究室へ来てください。いえ、あなたはわたしに話があるハズです。そこでゆくり聞かせていただきたいと考えています』

それは十分聞き取れる造語会話だ。とたんネオンがアルトへ振り返ってみせた。言ったとおりが始まるのか、それともさらに予測不能の事態へ陥るのか、請うてすが、ような瞳で、これまでにないほどの不安を噴出させる。

だがアルトに、答えられることなど何もなかった。

向かいでは手厳しいクレツシエの言いように、皮肉な笑みを浮かべてシャツフルが身を翻している。

睨みアルトは、唇を噛んだ。

ここまでくれば、遅かれ早かれそれは知れることなのだ。

案の定、歩み寄ったシャツフルもまた、クレツシエの指示通り滅菌ゲルへ連れ出すべくその体へ腕を伸ばしている。迷うことなくネオンを掴んだ。

「え？」

ハッチの外へ歩き出す。

「うそ。ちよつと、わたしはっ……！」

よもや自分だと思つてもいなかったネオンの声は、素っ頓狂だ。

「何、違うつてば、どーなつてんのっ？」

動転して繰り返せば、見送るアルトの耳にその声は刺さった。

「痛い。これ、違うつてばっ！ でしょっ？ アルトっ、あたしはネオンだつて、言つてやつてよっ！」

たまらずアルトも叫び返す。

「決めたんだろうがッ。忘れた時とはさよならするつて。ボルシチ食いながら俺は聞いたぞッ。だったらお前はこれからもネオンだッ。それ以外、信じるなッ」

「言つてゐる意味が、わかんない……」

そこでネオンの声は途切れた。シャツフルに押し込まれるがまま、くぐつた壁際のウイルスカーテン奥へ姿を消す。とたん力尽きたような沈黙が、後味の悪さを引きつれカーゴ内でふくれ上がった。かき乱して互いの距離を詰めたのは、クレッシェだ。

白衣が縮まる距離に比例して、見えない雑菌を感じたその表面をまだらに変えてゆく。あつという間に七色のマーブル模様はクレッシェの胸元に広がると、無表情すぎた白衣に個性さえを与えてみせた。それは同時にまとうクレッシェの表情さえもを一変させると、毒々しくも禍々しい色合いに縁取られたその顔を、アルトの中で身も

すくむほどの怪物と重なり合わせる。その怪物は、決して荒々しさを露呈することのない穏やかな瞳で、静かにアルトへこう語ってみせた。

『あなたがアルトなど？ どこでどう入れ替わればそんなことに？』

この感情が伝わらぬハズもない。ならばとアルトもまた言つてやる。

『イルサリが、とうとうしくじったのかもしれない。記憶をマークしても、それだけは覚えていたらしくてね。気付けばそれが俺の、名前になっていた』

クレツシエの上に広がるシミは、もう白衣の肩や袖口までもを覆っていた。極彩色を巧みに絡ませ、蠢き、目にも鮮やかにサイケと競い合っている。

『取り繕うことのない回答は大歓迎です』

揺らしてクレツシエは目の前で立ち止まっていた。その口調をひと思いと厳しいものへすり替える。

『ですが、イルサリはこれまで一度もしくじったことなどはありません。それはあなたが一番よく知っているハズです。それほどまでに気がかりならば、背のモノはお捨てなさい』

やおら見えるはずもないものの存在を、指摘してみせた。

やはりお見通しだったらしい。

『使い損ねたまでさ』

めいっばいに茶化してアルトは返す。

おかげでようやく気づいたらしい。分隊員が、突きつけられた自らの失態に慌てふためきアルトの腰周りをまさぐった。あつけなくも発見されたスタンエアは、そんな分隊員の手によって装填済みエアを開放されてしまう。白衣のポケットからガーゼを取り出したクレツシエへ、手渡されていた。

受け取ったクレツシエは、じつにつまらなさそうだ。スタンエアを一瞥し、アルトへその顔を向けなおす。

『なるほど。ならばここでもう一度、あなたと共に確認しておかなければならないことがあるようですね』

持ち上げるスタンエア。

『よいですか？ 二度と忘れぬよう、その頭へ叩き込んでおきなさい』

言ってねじ込むように、アルトの額へその銃口を押し付けた。

感触に、空砲だと理解していてもアルトの全身に緊張は走る。

『あなたはラボ従事者としてヒト胚から抽出された連邦所有合成塩基の有機体。当ラボにてわたしが合成した塩基ナンバー11 セフポド・キシム・プロキセチルです。

我々のれっきとした所有物であることを、少しは自覚なさい。大事なデータを連れ出すどころか、盾にとつて脅そうなどと身の程知らずにもほどがある。確かに、あたなたのその行動力と自発性は、同様に合成、生成され続けた有機体の中でも特に高く評価するに値します。ですがそれが今後裏目に出続けるというのなら、空砲ではなく今度こそ実弾を打ち込まなければならなくなる』

同時に引かれるトリガー。

覇氣のないエア音がアルトの、いや、セフポドと呼ばれたその額で漏れ出した。否応なく心臓は跳ね上がって、アルトは息をのむ。

見定めクレツシエは腕を下ろした。

『そうならぬことを願っていますよ、セフ』

やたらに甘い声。

久方ぶりの名と共に、それはやけにアルトの耳に絡んで障る。

『あなたはそうするに口惜しいほどの出来栄えでなのす。二度、同じように仕上がるか、わたしにも自信はない』

ぬけぬけと言いつ放つ様こそが怪物だった。

『それは光栄なことだ』

それが精一杯の抵抗だ。十分に伝わったのだろう。

『詳細は問い詰めません』

聞き流すクレツシエが、うごめくサイケな白衣を翻していた。

『さて、あなたにこれ以上無駄な時間を与える余裕はありません。すぐにも自身がラボへ与えた損失の埋め合わせにかかっていたいただきます』

つまりはシャッフルに告げたとおり、プロジェクトの再開へ着手しろということらしい。

『ハブA-Iの自閉は解かない』

矢継ぎ早、アルトは言い放っていた。それはクレツシエの一足飛びな話しづりを真似たつもりだ。だがクレツシエは目を丸くすると、笑い出しそうに天を仰いでみせる。

『あなたは自分の言っていることを分かっているのですか？』

否や、緩めた表情へ険しい影を落とした。心底冷えきった視線でアルトを射抜く。

『この、愚か者！』

自らに向けられたわけでもないというのに、アルトの背後で食らった分隊員が小さく跳ねていた。

『あなたが拒むと言うのなら、もとよりアルトは量産体勢に入る予定のモノでした。

リスクは背負うもののマスターを潰して解析を進めるまでです。どうです？　まだ先を言わねばなりませんか？』

持て余していたスタンエアを、そんな分隊員へ押し付けるようにクレツシエは突き返す。手を乱暴に、極彩色の白衣のポケットへ突っ込んだ。

『いいですか、あなたが踊らされているものを、今ここではつきりさせておきましょう』

などと放たれる正論は、今さら聞くまでもないものだ。だからこそクレツシエはあえて見せつけ、はつきりさせようとしている。

『それは同郷と同胞。その野蠻で泥臭い幻想と誤解に他なりません。もちろん、あなたにそれはない。あなたはそのようなこだわりが生み出す軋轢、それを解消するため生成されたラボ従事者であり、ラボそのものが今後の世界のあり方のモデルグループなのです。少しは頭を冷やしなさい。あなたがあてられて何になるというのです。今この状況こそ、わたくしの最も不愉快とする現象だ』

耐えられないと言わんばかり、顔をそむけた。それでもどうにか噛み潰し、クレツシエは横目にアルトをとらえなおす。

『いいえ、だからこそあなたはハブAIの自閉を解かなければならないハズです。丸

見えなのですよ。たとえ機会があつたとしても、あなたがアルトヘスタンエアを使うようなことはしない』

試すように再度、その名を呼んでみせた。

『違いますか？ セフ？ そこには、あなたがこだわってやまないものがある』

『真っ直ぐ歩け』

光線の色が異なるウィルスカーテンをさらにもう一枚、潜る。陽光線に焼き付けられるようなジリリとした感触が襲つたかと思うと、どこからともなく焦げたような匂いが立ち上り、ネオンの鼻先をくすぐっていた。

『エブランチル』らしき白衣の前から立ち去つてすぐ、ネオンの腕を引く青白い顔の『パナール』は態度を一変させている。卑屈なまでにかしこまっていた自らへの怒りを噴出させると、容赦なくそれをネオンへぶつけていた。対抗できる余地などないなら、自分がネオンであることを訴え続けることにも精根尽き果て、ネオンはただ成すがままに振り回されると細いかかとを通路へねじ込む。

通路は整然と伸び、ふたりの行く手を遮る者は現れなかった。

恐らくこれが最後だろう。床から天井へと差し込むウィルスカーテンがまた、現れる。

潜り抜けそこに扉はあった。いや、隔壁ともとれるそれは頑強な造りの壁だ。そしてそこには数種類の言語でもってして、何事かが記されていた。辿り、ネオンは視線を走らせる。読み取れた文字は「F7」だ。それは自分がかつていただろう場所の名前であり、そして連れ戻しに船賊が現れ、『フェイオン』が没し、軍が姿を現した元凶の、そうはさせないとアルトを言わしめた場所の名で間違いなかった。

ネオンの胸がひとつ大きく脈打つ。身に覚えのないタブーが、決めようのない覚悟を性急に求めてネオンの中を駆け巡った。

知る由もなく『バナール』は、慣れた手つきで胸元の階級章を外している。扉の脇に開かれたリーダーへかざした。音もなく読み取りは完了し、停電とは無縁の循環式光粒子ロックがプリズムを反射させる。遮られた循環粒子に跳ね上がったロックは解除され、重いはずの扉はしかしながら滑るような動きで、静かにスライドしていった。やおら先を争い、奥から独特の薬品臭が流れ込んでくる。とたん胃の腑にこみ上げてくるのは、条件反射にも似た不快感だ。それは深い深い部分、獣が炎をおそれるような原始的な恐怖としてネオンを襲った。腰が引けるとはこのことだろう。ワケもわ

からぬまま、すぐにも逃げ出したい衝動に駆られネオンは身をよじる。踵を返せば、掴まれていた腕がねじれた。だが、今感じている恐怖に比べればその痛みなど、どうということはない。かまわず『バナール』を振りほどこうともがく。

『ここまで来て、てこずらせるな！ この筐体が！』

やおらその腕を掴みなおした『バナール』が、罵声を浴びせていた。大きさに、振り返ったネオンの横面を、叩く。衝撃と頬を走る痺れに戦意の全てを削がれ、ネオンは崩れるようにその場へうずくまっていた。それすら許さず『バナール』は、立たせてネオンを『F7』の中へ引きずり込んでゆく。

と、どこからともなく聞こえてきたのは、数多くの造語の話し声と、機械の吐き出す熱風の、遠く近くに迫る嵐のような音だ。重なり行き交う靴音もまた、そんなネオンの回りで慌ただしげに交錯し始めた。

縮こまっていた胸元から、ネオンはおずおずと顔を上げてゆく。恐る恐る、辺りへ視線を這わせていった。ならハレーションを起こしたかと思うほど白く、整然と仕切られた風景は飛び込んでくる。遠近感が消えたようで、ネオンは目を瞬かせた。だが聞こえてくる数に見合ったモノ影こそ見て取れず、全ては左右に立ち塞がった仕切り向こうにいるのだ、という事を理解する。

『まさかクレツシエが格納庫にまで出向くとは。わたしもヤキが回ったものだ』
その中、進行方向一点を見据えた『バナール』がぼそり、吐きだしていた。

『あたしを、どうするつもりなの？』

体中の力を振り絞り、ネオンは問う。造語に、驚き『バナール』が振り返っていた。
見下ろす眉間をきつく狭め、また前へと向きなおる。

『外をフラついているうちに造語を覚えたというわけか。まあ、しかるべき結果ではあるな。耳を良くしたのは我々だ』

求めている答えはそれではない。訴えネオンは歩みを止めた。

『どうするつもりなの？』

『止まるな、歩け！』

だが、抜けんばかりにまた腕は引かれ、上体をさらわれネオンは再びどこへ向かうやも知れない『バナール』に寄り添わされる。

『どれもこれも、一人前の口をきくようになりおつて。これが今後のリハーサルだったとしたならば、記憶マーカーによるメンテナンスの頻度は想定回数より増やさねばならんようだな。となれば何よりハブAIの通常稼動が必至か』

ひとり言と『バナール』がまくし立てていた。

『貴様が知りたいと思えるのも、このひと時だけというわけだ』

いまいましげと、その目をネオンへ向ける。

『ならば教えておいてやろうではないか』

言葉は意味ありげで、ネオンは息をのんでいた。『バナール』は、そんなネオンへ淀むことなく話してみせる。

『我々はこれから貴様の量産体制に入る。何もラボとて貴様を失って、ただあてどなく探しまわっていただけではない。ダブルワン塩基は、クレッシェのあのうんざりするような詳細な記憶に基づき、再合成された。元に筐体は規定数、生成済みとなっている。あとは試行錯誤を重ね組み上げた貴様の脳細胞マップを三次元ダビング、イルサリを通して各筐体内に形成させるだけだ。もちろん、その忌々しい自我を調整したうえでな』

『きようたい……？ イルサリ……？』

飲み込めぬネオンの口調はぎこちない。

『ここから連れ出される前の状態にリセットせねば、全くもって使い物にならん。疑問に不安を抱くことも、抵抗を試みて痛い目を見ることも、それまでの不自由というわけだ。次に目を覚ました時は、その一切とは無縁となる。ただし……』

とそこで『バナール』は足を止める。通路突き当たり、この区画の最も奥に位置する手動の物理ロックへ手を掛けた。歯車のようなそれを片手で回し始める。

『それはヤツがハブA Iの自閉を解いた場合に限る。拒否するようであれば……』

キリキリ音が鳴るたびに扉は壁面から浮き上がり、やがてガタリという音と共に手前へ落ちると開いた。上部にはベアリングが噛まされているようだ。吊られた扉を『バナール』はスライドさせてゆく。隙間から、青白い光は漏れ出していた。呆然とするネオンの靴先へ、かかつて照らし出す。

ここに、覚えはある。

それは彼方から降り注ぐ音と同じだった。

とたんネオンへ確信は、どつかと降る。

かまわず『バナール』が、扉の中へ身を潜り込ませていた。最後、一言をネオンへ綴てみせる。

『貴様は物理解体され、二度と目覚めない』

聞き逃しそうになり、ネオンは咄嗟に顔を上げていた。同時にネオンもまた、扉の向こうへ引き込まれる。そこに空間は漏れた光のまま青白く、薄ら暗いまま広がっていた。装飾は一切、うかがえない。ただ偏光アクリラに覆われた蒼い柱が、一点透視

法よろしく奥まで延々と並んでいる。何をそうまで支えているのか、果ては見えぬほどと、数はおびただしかった。他に誰も見当たらない。

『バナール』が後ろ手に扉を引き寄せ、閉めている。

立て続け、それまで固定され続けていたネオンの腕の物理鍵を解いた。

それだけで気が抜けるほどにほっとすれば、『バナール』は最も手前の柱根元を荒々しく蹴り上げる。柱は破裂したかのように割れて観音扉を開き、『バナール』は開いたそこへゴミかとネオンを投げ入れた。肩幅ちようどの空間に、頭をぶつけてネオンは顔を歪める。文句のひとつも飛び出しかけて、閉じられた観音扉にそれを遮られていた。目の前が、囲う柱の蒼一色に塗り替わり、出して、と両手をアクリラへ張りつけたなら、陳列物でも眺めるかのように『バナール』の歪んだ顔は中をのぞきこむ。

と、ネオンの足元から液体は湧きだしていた。いや、滅菌ゲルだ。すぐにも膝を覆い、腰を浸し、やがては喉までにせり上がってくる。止まることなく柱の中を満たしてゆけば、ネオンの頭を超え、やがて満杯となった。

反射的の止めた息が、限界を迎えるにそうも時間はかかっていない。

吸い込み、溺れたと錯覚すれば、しばしその慣れない感覚にパニックを起こして肺

がゲルに浸され膨らむまで、ネオンは柱の中のたうった。おさまれば、比重の高いゲルの中、ふわり、浮き上がる。

見届けた『バナール』が、踵を返していた。恐らく格納庫で言っていたように、あの白衣の元へ向かうのだろう。呼び止めネオンは何度も拳で柱を叩きつける。声が出せないのだから、代わりとばかり鈍くこもった柱の音を辺りへ、響かせ続けた。

しかし『バナール』は振り返らない。やがて扉の向こうへ『バナール』の背は消え去る。無力感に襲われネオンは、叩きつけていた拳を下ろしていった。なおさら体がぶかり、再び柱の中で心地よいほどに浮かび上がる。

静かだ。

それは時間が止まってしまったような、静けさだった。

ネオンの思考もまた、そこからびたり進まなくなる。

むしろ頭のどこかが拒否しているかのようにぼやけて膜を張ると、二度と目覚めない、というくだりだけを回転させてネオンをそこへ閉じ込めた。

ままにネオンは初めて辺りへ、頭をひねる。

そこに映りこむ自分を見た。

おや、と思う。

何しろその自分は、何も着ていない。

何かがおかしい。

ネオンはしばし目を瞬かせた。

そして、見ているソレは、映り込んだ自分の姿でないことを理解する。

全く別の、もう一人の自分だ。

入室者がいなくなつたことで室内照明が絞られたせいだろう、今ならどの柱の中も透けて見えていた。まさか、と目をやった見える限りの全ての柱には、裸の自分が収められている。

驚きのあまり、ネオンはひととき大きく滅菌ゲルを吸い込んでいた。後ずさるがその余地はなく、勢いよく柱へ体をぶつける。その拍子に響いた音は、ゴツンと鈍かった。刺激されて、それまで静かに目を閉じていた全ての自分は、やおら目を覚ましてゆく。隣でも向こうでも、次々瞳は開いてゆくと、何事か、と不快を表すでもなく微笑むでもなく、同じ瞳で一斉にネオンを見た。

囲まれ、ネオンは自分の中で何か砂のようなものがサラサラと流れ落ちて行くのを、感じ取る。そのまま溶けるように声もなく、大勢の中でたった一人だけ、その目を閉じていった。

そこで一人、振り返る。

気配などではない、それは確信だった。

靴音は聞こえている。

うるさすぎる部屋は苦手だと言ったはずなのに、いつまでたっても分かってはもらえない。だからここへ逃げ込んだのだ。

案の定、ドアのスモークは解かれていた。寄りかかりのぞき込む顔は、いつもにも増してしかめつ面だ。しかしながらどんな表情だろうと、その通りと大正解。とらえてネオンは口を開く。

「……みつかっちゃった」

諭されても、叱られた記憶はなかった。それは入れ替わり立ち代り、まるで日替わりメニューのように通り過ぎる様々な顔ぶれの中でも、目覚め、眠るときには必ず傍らにある顔だ。安堵すら覚えてネオンは、アンプの上でドアへと座りなおす。今回も、連れ出されるだけだと開き直っていた。ただ微笑んで、お馴染みの展開を待ちうけると、不意にその姿はドアの向こうから消えていた。

期待を削がれたようで、ぶらぶら遊ばせていた両足の動きさえ止まる。

なら気付いたように影は舞い戻り、ドアは押し開けられていた。

なんだ、と思えば、背筋も得意げと伸びてゆく。

ままに立ち上がりかけて、足元へ屈み込まれていた。

その手には見慣れないモノがある。

そろえて床へ置くなり、ネオンのエアソールシューズを脱がせにかかった。

「たとえベッドルームでも、自由行動の度が過ぎる」

もがれたエアソールシューズが、追いやられてゆく。

「あたしのクツ」

酷い仕打ちだと口をすぼめていた。代わりにネオンの足へ、見慣れないそれはあてがわれる。

「今日からはコイツでも履いてろ。これでちょうどいい」

それはエアソールシューズとまるで正反対と、ひどく窮屈な履き心地だった。履いてまもなくつま先が痛み始め、立ち上がるなどともつてのほかとなる。試してよろけ、ネオンは再びアンプへ尻もちをついていた。

「いやだよ」

早々に渋って返す。なにしろやたらかかたが高いのだ。しかも不条理なまでに細く、

それは爪先立ちよりたちが悪かった。しかし奪われたエアソールシューズは、自由もろともすでにその手に匿われている。もう返してもらえそうにない。睨みつけ、ネオンは先ほどドア越し見た渋面以上のしかめっ面を作って返した。

「元に戻してよ、セフ」

「おとなしくてしたらそのうち返してやるよ。アルト」

醒めるほどに白い上着からは、鼻について止まない薬品の匂いがしていた。嫌なこととはそれだけだ。それ以外、セフは嘘さえついたことがない。だからネオンは飲み込むことにする。けれど一人では動けそうになかった。無言のまま、甘えるように両手を伸ばした。応じてセフはその手を取る。立ち上がりとするネオンを引き寄せ、その両足をすくい上げた。抱え上げられたネオンの胸から楽器が滑り、落ちそうになる。押さえてネオンは白い上着の襟へ、しがみついた。

薬品の匂いに混じってほんの少し、違う匂いが鼻をかすめる。

温かな匂いだ。

吸い込んで、そう思っていた。

ポッドは窮屈でたまらない。そして時にネオンを不快な迷路へ陥れる檻でしかなかった。冷たく固いその中で、いつからかネオンは疲れ果ててうんざりしている。

早く帰りた。

願いは確かなものとなっていた。

けれどそれがどこのかが、分らない。

ただこの匂いに、その手がかりを感じ取る。

格別に温かいそこなら帰りた、くるまるまに身を沈めていった。

前に、泉は今日も広がる。

深く澄み切った泉の水面には波ひとつ立っておらず、眺めて吸い寄せられるように、ネオンは縁へ腰を下ろした。鏡のような湖面を覗き込めば、漂う静けさが疲れも恐れも、後に訪れるだろう不快さえ消し去ってゆく。その心地よさに、記憶に残る眠りの気配は過っていた。拒む理由などどこにもない。応じてネオンは柔らかく自らをほどいてゆく。ほどこながら静けさの底へ、深く深く潜っていった。

瞳を閉じる。

ただそれだけで。

経てゆつくりと、まぶたを開いてゆく。

あの浮遊感と匂いはまだ胸に指先に新しかった。

それどころかまるで地続きかと疑うほど、目覚めは穏やかだ。

「セフ……」

ここではそう呼び合っていた、ひどく曖昧で断片的な記憶。

思えば、押しのけ逃げなかった不思議な信頼感の正体を、今さらのように知らされる。

そんな視界の端に、あの冴え渡る白はあった。思わず白衣かと目を凝らし、自分にかけられたシャツだと気づいてネオンは息を吐く。

いつしか体は滅菌ゲルからベッドの上へ移されていた。

とたん蘇るつい先ほどの光景に、数え切れないほどと並べられた己の姿は舞い戻る。あった浮遊感は粉々に吹き飛び、貴様の量産体制に入る、二度と目覚めることはない、言い放ったバナルの言葉が頭を駆け巡った。共に撃ち込まれたものが恐怖以外の何物でもなかったなら、たちまちネオンはセフなら何とかしてくれるはずだ、と姿を探してその目を泳がせる。やがてその姿は夢でなく、現実の残像としてこの部屋中を歩き回った。ベッドの上から眺めてネオンは、果たしてどちらが現実なのか、いや、どちらが失いつつある現実感なのかを分からなくしてゆく。

なら目の前で、ネオンはネオンへ振り返っていた。

何言ってるの？ どちらもあたしじゃない。

無邪気に笑う。

その頬が、揺れて膨らんでいった。彼女は飛び散り、欠片は砂とネオンを飲み込む。吸い込んでネオンはそう、と唇を震わせていた。

そう、バナールが腕を掴んで引きずり出したことに間違いはない。ここでは自分がアルトだったのだ。そのアルトは、ここでうんざりするほど時間の狭間を行き来すると、楽器を演奏するよう仕込まれ、大事にされたが相手にはされず、疲れ果てて心の底までを痺れ切らせて過ごしていた。それこそが探していた記憶であり、帰ろうとしていた場所。

だがようやく得たというのに、醒めたような感覚は一切ない。トラの元でドサ周りを続けていた時に願っていたような充足感、これぼっちもわいてこなかった。ただ悲しくもわびしさばかりが募ると、触れたネオンを追いかけるグロテスクな亡霊となつて、過去は不安に不快に恐怖と不満ばかりを押しつけてくる。

帰りたい。

『F7』の扉をくぐったとき感じた嫌悪感が、強くネオンの中へ舞い戻っていた。

憑りつかれたように起き上がり、その腕に違和感を覚えて振り返る。そこに針は固定

されていた。いつからか宙に吊られた透明の薬剤から、まさに機械的なテンポでもってしてネオンの中へ液体は流し込まれている。

得体の知れなさに、やおら肌が泡立っていた。目じりを吊り上げ、ネオンは針へ手を掛ける。引き抜こうと力を込めた。が、皮膚が突っ張るばかりで、針は抜けそうもない。だとして痛みなど問題ではなかった。力任せと繰り返せば、続く無茶に腕へ血は赤く滲み始める。

さなか、部屋の扉は開け放たれていた。

足音が慌ただしくネオンへ駆け寄ってくる。

かと思えば、肩を掴まれていた。

「何してるッ？」

「触らないでっ！　はずすに決まってるでしょっ！」

ネオンは喚き、その手を振り払う。

「落ち着けッ」

とたん針を筆り取ろうとした手を取られていた。

「ただの電解質だッ」

言うが信用できる道理こそない。いや、記憶がそう訴えていた。

「離してっ！」

拒み暴れたなら、吊られた薬剤が引つ張られ、今にも土台ごと倒れそうに揺れ動く。見かねて埒があかないと、たしなめようとしていた手は突如、ネオンをベッドへ押さえつけた。

「何すんのよっ」

「動くな。それ以上引つ張れば静脈に傷がつくッ」

「離してっ！」

言ううちにも、押さえつけながら器用に薬剤の落下を止める。

「いやだっ！」

自由な手で滅多打つネオンをもろともせず、針の根元に突き出ていた細いアンプルのような突起を親指で弾き折った。破片を足元のダストボックスへ落とし、枕元のアルコール臭漂う代替綿花をつまんであてがう。その下から、針を抜き取った。おっつけ、こすり付けるように代替綿花で拭えば、無理に引つ張ってできた痣だけがネオンの暴挙ぶりを示してそこに、赤黒く残る。

「バイオゲージは剥離剤がなければ……」

などと講釈こそ感情にそぐわない。

ネオンは手を振り上げる。

口上垂れるその頬めがけ、叩き付けた。

鋭くも乾いた音は空気を裂き、言葉も尻切れトンボにアルトがあらぬ方向を向いたままで目を細める。

いや、これはセフか？

素材は違うが、白い上着が夢と同じだ。

とたん記憶が記憶を食った。

もう、どちらだつてかまわない。

「あたしに触らないでっ！ あたしは、あなたたちが好きに出来るモノじゃないっ！」
ネオンはその顔へ吐きつける。それは自分でもいやというほど甲高い、ヒステリックな声だった。

食らったアルトが自らを落ち着けるべく、そこで大きく息を吐き出している。やがてゆっくりと、その顔をネオンへ戻していった。

「分かってる。お前はネオンなんだろう？」

そう、叱られた記憶はない。アルトは何より混乱していた事実を、ネオンへ言い聞かせる。

見据えたネオンの唇は、とたんミシリと音を立てて歪んでいた。取り繕うなどもうできない。悲鳴にも似た声を上げ、ネオンは思い切り泣いていた。引き裂く思いはまさに、あのとき口にできなかった感情だ。いや、できぬよう矯正されていた全てで間違いなかった。ほどこされていけない今、思い出し始めたそれは溢れてネオンを急き立てる。だが吐き出そうとして追いつくハズもないなら、全ては鳴咽の合間からもれる叫びとなっていた。今や血の気が失せていたはずの頬は、叩かれたアルトの、セフボドのそれより赤味を帯びている。

やがて枯れ果て、思いは涙にのまれていった。

それでも言わずにおれない何かが、低い唸り声へと姿を変える。

「あたしは、もうイヤダよ……」

頬には幾筋もの涙の跡がはりついていた。

「……かえしてよ。わたしを、わたしに、返してよ……」

繰り返してアルトを覗き込んだ瞳は、感情になぶられるまま縮み上がっている。

「わたしをウチへ、帰してよっ！……」

そうして掴んだものが宙だったとして、投げつけネオンが腕を振り下ろしていた。見えやしないにもかかわらず飛び行くそれが、弱々しい弧を描いて二人をつなぐ。

見届けることなくネオンはそれきり、糸が切れたようにうつむいた。水を打ったような静けさの中、シーツを弾いて零れ落ちる涙の音だけが、ひどく単調なテンポを刻み続ける。

ウィルスコーティングがどこされていないなら、あの頃から嫌う薬品の匂いはしないはずだった。見つめてアルトは、有り合わせだった白衣の袖から腕を抜く。その白衣で、何も身につけていないネオンの肩を包みこんだ。前を合わせ、乱れたシーツを引き寄せてやる。

何しろ苛立っていたシャツフルのせいで着の身着のまま滅菌ゲルの中へ放り込まれたネオンの服は、ゲルまみれでもう使い物にならない。全て脱がされ裸同然だというのに、言及しないネオンの混乱は、それほどまでにすさまじかった。

「時間はある。眠りたいだけ、眠ればいい」

投げかけアルトは、その身を横たえさせる。力尽きたように従うネオンは、くるまれるままおとなしく、ただ目を閉じていった。

そこに夢の続きは、再び広がる。

記憶に残る眠りが今もネオンを手招いていた。

ひどく疲れた今もまた、拒む道理などありはしない。

ネオンはゆらり、身を預ける。

傍らから、様子を確かめた足音が遠ざかるのを感じ取っていた。

「眠るまで……、ここにいて」

ぼんやりと、呼び止める。

だが答えが返されるまで、しばらく。

「……それは、イルサリでお前の志向性を調整する時だ。今は必要ない」

声はようやく聞こえていた。

「あたし、見た」

まどろみの中にいる今なら、思い出してもそれほど怖く感じていない。声へ向かってネオンは言った。

「あの部屋に、たくさんのあたしが、いた……。みんなが、こっちを見てた」

消化し切れなかったあの時をやり直すように、少しずつ言葉を手繰り寄せてみる。

「たくさん、造ったんだ……。でも、いらないよね。あんなに。あたしは一人で、じゅうぶんだよ。あなただって、そう思ってる。だからあたしを奴らに渡したくなかった」

まぶたを開けば、そこに広がる世界はまつ毛にたまった涙のせいであらゆるものが

歪み、輪郭を失っていた。

「この記憶を塞いでも……」

ただ足元から聞こえてくる声だけに耳を澄ます。

「塞いでも、演奏の方法を忘れたのは、記憶じゃなく機能としてお前の脳に組み込まれているからさ」

言うアルトの切り出し方は、独特だった。

「その話、眠るまで聞かせて。あたしはちゃんと覚えていない。ううん。覚えていられないあたしだった。けど今は違う。今のうちに、全部知っておきたい。だってそれが、あたしだもの」

そう願うほど取り戻し始めた落ち着きは、どうやらアルトを観念させたようだった。

「しばらく気づけなかったな」

切り出す口調からは、それまでであった力が抜け落ちている。

「ポッドに記されていたっていう、お前の名前。NEONE（ネオン）の意味が」

ままに声は近づき、ネオンの足元でベッドをきしませた。

「11（ダブルワン）塩基。ONE-ONE。種族を識別するため、表記は造語じゃなかった。あの騒動の中、どこかで頭一文字、削り取られたんだ」

腰かけ前かがみとなれば、滲む視界に少しばかりアルト髪は映り込む。見つけてネオンは安心したように、再び目を閉じていった。

「そう、足りないのさ。言葉だけじゃ。理解できるような意味だけじゃ。いや、そればかりじゃ多すぎるのかもしれない。生まれて白紙のその身へ刻む言語ってやつは、澱のように文化や風土や宗教的価値観の、帰属すべく故郷って場所のDNAだ。埋め込まれて活動を始めたなら、誰だつて剥がしうなく身体の一部になる。しかも言語活動は意識と意思の存在証明だ。譲れば代わりなんて用意されていない唯一の出所を疑うパラドックスなんて、ありはしない。だがそこにこそ、地域差や個人差、価値観の違いの根っこは潜んでいる。奴らは、バラバラに埋め込まれたそいつを取り払ったいのさ」

と、声のトーンはそこで跳ね上がる。

「意識の底にある、言葉にくるまれた生来のナシヨナリズムを。帰属意識、故郷とも呼ばれるカテゴリーを、操作できる一様のものに挿げ替えたいのさ。果たそうとして創造した造語は、船賊の出現で中途半端な結果に終わっちゃった。ふまえてココを用意したはいが……」

途切れた先に熱はこもる。それはネオンの耳へ張り付き、紛らせアルトは一息、吐

くと静かに続けた。

「連邦は新たな方法としてアナログ楽器と極Ｙトニック、かつて唯一、既知宇宙を制覇した言葉に頼ることのない二つの事象に目をつけている。過去、二つの事象は暴走したが、そいつをお前に内包させてお前を通してコントロールできる状態にするつもりだ。見たる？ 共鳴した船賊たちの船の中での騒動を。アズウエルの騒ぎもだ。モデリングは大成功かもな」

口調はいつとき皮肉を帯び、舌打ちかき消す。

「ばら撒いて、既知宇宙内全てをああしたいらしい。そのために楽器も全て回収されると、元からあったアナログ文化も根絶やしと白紙に戻されている。言いたかないが」
そう呼びかけるアルトの声には、砂を噛むようなざらつきがあった。

「お前が見たものも、お前自身も……」

そうして言う顔色が見て取れるほど冴えない響きを、ネオンへ伝える。

「……このプロジェクトのため連邦所有の合成塩基１からラボで生成されたソプラノ、アルト、テナーのうち第二号有機体、アルト。そう名乗っていた俺は、そのプロジェクトのために生成されたラボ従事者、セフポドだ」

だがネオンに同じだけの重みはない。むしろ告げられ、ほっと胸をなでおろして

いた。それはちょうど、穴だらけだった地図がようやく埋め合わされたような、せいせいした気分さえ感じ取れるほどにあっけなかった。

「そう」

答えてまぶたを持ち上げる。

「じゃ、あたしがいると、みんなに悪いよね」

銃口を突きつけられるわけだと、思う。

「いいか悪いか……何が正しいのかなんて、誰にも分かりはしない。ただ俺は……」
取り繕ってアルトの言葉は上滑り、やがて足場をとらえなおしたかのように慎重と言いつつ直していった。

「ただ俺は、そうまでして奴らが躍起になるモノと付き合ううちに、自分にそれが欠片もないことに気づかされたただけだ。形は備わっていても、それは奴らの意図の元に造り上げられたものだ。そう、俺の底には、このラボで生成された奴らの全てには理屈抜きの、間違いなく有ると思える意識の絶対不動な根拠が、ない。しょせんは奴らの魂胆にすり替えられる、意思と意識の持ち主でしかないってわけだ。そうだな、俺なんて主張できるモノは、本当はどこにもいない。……装っただけの無だっけね」

そうして途切れた言葉がそこに、暗く黒い穴をうがつ。

「だが、奴らが変えたい世界つてのは、そういうもんだ」

振り払いアルトが声を張っていた。

「思い通りいかないその不都合を取り払って、理屈通り自由に掌握すれば、された方はそうなるしかない。なくせばどれほど空しいものか、奴らは分かっちゃいないんだ。物理的に生きているだけじゃダメだ。いまだ定義することのできない生命の一部には定義を拒む、誰の思惟にも触れない絶対的なものが必要だってことを分かっている。その吸引力で個は無条件に個を保ち、軸に意思は回っている。人はそんな言語の、意識の種を、神と言つてのけた時代もあったが、そいつを消して、ましてそのうえで全てを操作しようなんてのは」

言い切った声に固い響きは混じる。

「たまらなく酷い話だ」

だからといってネオンに同意を求めるはしなかった。ただ小さく鼻で笑った気配が揺れる。

「……て、こんな話じゃ、眠れないよな」

つられてネオンも微かに唇を緩めていた。

「いいよ、別に……。あたしは……、帰りたいだけだった。そんな故郷(ぼしよ)、な

くたつて、ここからウチへ帰りたいだけだった。そのために靴も、楽器も……」想像して影を追いかける。

音はどこからともなく降り注ぎ、それれもここにわたしは有ると、ネオンへ語り続けていた。

なるほど、神と思えばそれは、それはそんな天からの福音に違いない。

けれどそうして手繰る自分が世界中から、それを奪うのだとしたら。

あるからこそ意見は割れて、こうしてどこかで誰かが果てなくいがみ合うのだとしたら。

開けても開けても出てくる箱の底には、こう書いてある。

「完璧な世界」

そうしていつからかどこからか、ネオンは望んでいた眠りの中へ迷いこんでいた。

仮死ポッドの中とは違い、繰り返す満足げな寝息に深くその胸を揺らした。

耳にしたからこそ、アルトは振り返る。

「本当は誰も……、どれだけがみ合おうと、誰も独りにはなれない。……だからつて、まとめられてひとつにもなれないのさ」

ようやく穏やかさを取り戻したその顔へ、言っていた。

「そのわずらわしさをかいくぐるのが、生きている証拠なんだ。命は、言葉にほどけたりしない存在の不条理で呼吸してゐるってハナシだ。トニック動話の志向性を残したことがその一因だとしても、あのときこのラボの中で唯一、お前にはゆるぎないその命の匂いがしていたよ」

思い出すほどに、切なさはいきよみ上げてくる。

「そんなお前が紡ぎ出す意思で、少なくとも初めて俺の前に、言葉に解けないモノの存在を示してくれた。そいつでありはしなないと思つていた俺の中へ、俺自身の言葉を植え付けた。俺にとつて、お前は理解に苦しむ初めての『他人』だ」

だが世界に残したいがこそ、己にとつての唯一を撃ちぬくのかと想像する。浮かべた笑みは、おのずと皮肉なものにならざるを得なかった。

「お前のこだわりじゃないが、俺のクツは、自由に動くために必要なクツは、お前なんだ、きつと……。裸足じやどこへも行けやしなかった。どれだけ体が動こうとも、意思なんてものは欠片も動きはしなかった」

でなければプロジェクトの真意を漏らしたシャツフルの言葉に踊らされたところで、あれほど好戦的には振舞えなかっただろう。

「そうだな、故郷を離れすぎた者がイルサリ症候群に憑り付かれるように、無くせば

きつとまた無に戻る。ただそれだけが……」

立ち上がっていた。

「今は死ぬほど怖い、な」

認めざるを得ないなら、皮肉だろうと笑みすら浮かばず、ままだアルトは傍らに立つ薬剤へ手を掛ける。引きずり歩き始めたところで、ふと我に返っていた。

「そうさ」

吐き出せば、空を睨んで両目は見開かれてゆく。

「誰も、極Ｙも、連邦も、だから……」

繰り返していた。

「だから譲れやしないんだ」

階級章が読み取られ、入室の許可が下りる。

附着しだだろう雑菌を考慮して、道すがらウイルスカーテンを三種も潜りなおしてきていた。シャツフルは、おかげですこぶる時間を食ったような錯覚に見舞われ、なお立場が悪化したのではないかと気をもむ。だからといって相手は『エブランチル』

のクレツシエだ。心の準備こそが、最も無駄な行為でもあった。

思い起こせば当時、『F7』の真の目的をラボ従事者へ吹聴したことは、自身の身の丈に合わぬ野心が想像力の限りに膨らんだせいだったと思い起こす。軽くあおげば自ずと燃え広がる火種はそのとき目の前で揺らめくと、チャンスだと、まったくもてシャツフルをそそのかしていた。

そもそもシャツフルにとつて、このプロジェクトは集大成ともいえる大仕事である。言わしめて有り余るほど、連邦にとつてもかつてない巨大戦略だった。だが戦略であればこそこれが世間へ公表されることはなく、携わった己が名を残すことも、世間から相当の評価を受けることも、ありはしない。

重々承知の上だった。

だが明かせない真相に、全ての栄誉がドクター・イルサリに仕立て上げられたAIなどにさらわれようとして初めて、感情はどこまでもシャツフル個人の所有物であることを思い知らされることになる。押し込めればそれは澱のように溜ると、やがてはシャツフルの内で消化できない異物へすり替わり、気づけば無視できぬ声で主張を続け、騒ぎを利用してアルトを独占しろと、交換にドクター・イルサリの名を我がものとすることを上層部へ突きつけると、揺らめいた。

そうして得るのは揺るぎない地位と名誉、そしてのみ消されることのない未来だ。しかし現実には、この体たらくだった。

いや、まだ終わったわけではない、とシャツフルは青白い頬へ、瞳へ、こめかみへ、好戦的な色を浮かび上がらせてゆく。ままに開いたドアの向こう側に、クレツシエの姿を探した。

立て込んでいた様子をうかがわせクレツシエは、ちやうどと新しい白衣へ袖を通している。苛立たしげな表情を、すぐにも気づいたシャツフルへ向けた。

『もう少し丁寧に扱っていただきたいですね。中尉』

言って、厚く塗られたコーティング剤で、白衣の前合わせをシールしてゆく。

『あれには代わりがないのです。せめてコピーが終了するまでは、無傷で保存しておきたい』

殴りつけたのがシャツフル自身なら、クレツシエの言う『あれ』がアルトのことであると気づくに、そう時間はかかっていない。

『何か、不都合でも？』

あえて問い返し、クレツシエの傍らへ歩み寄る。見向きもしないクレツシエは、立ち上げずみだった仮想デスクをスリープ状態へ切り替え、その口を開いた。

『滅菌ゲルシリリンダーのバイタルレポートより異常値が検出されました。単なる血圧の低下によるものでしたが、即座に回収。処置済みとなっています。復元塩基とオリジナル塩基の最終チェックへ入ろうとした矢先のことでした』

デスクは、伝えてよこした通りの作業ごと消え去り、がらんとした空間だけをふたりの周囲に残す。

『心配しているような外傷が原因ではありません』

相変わらぬの読みでクレツシエが、先を越してみせた。思わずシャツフルは奥歯を噛みしめ、その顔を見据える。

『ただあの場へ拘束するのであれば、周囲の状況への配慮をいただきましたかったところです。今のアルトには著しい自我が備わっている様子ですから』

弁解の余地はない。見切ったようにクレツシエも、それまでであった義理の笑みすら浮かべようとしなかった。ただ視線を、おもむろに部屋の隅へ飛ばす。理解できず、つられたようにシャツフルもそちらへ目をやった。

瞬間、風景は、はがれるように揺れ動く。

床をする足音は聞こえ、魚眼を通したかのごとくたわんで切り取られた風景は、クレツシエへ近づいた。

ミラー効果だ。

気づいたときにはもう遅い。

クレツシエの両脇へ、効果を切った分隊員たちは次々と姿を現してゆく。かまえられたダイラタンシーベレットのショットガンは、間違いなくシャツフルをとらえていた。

話したいことがあるハズだと呼びつけておいて、その話にはまだ一言も触れておらず、このありさまはやり口が汚すぎる。シャツフルから舌打ちはもれた。

『結論から申し上げましょう』

『それがあなたのやり方だ』

『当ラボにおけるあなたの役目は今この地点をもって終了いたしました。本日、この瞬間よりシャツフル中尉、あなたはこのラボから離れていただきます』

何のマネだとはばかりの隙すら、ありそうもない。

『近日中に本国へ帰還。あなたには新たな赴任先、クラウナートの採掘現場へ保健部員として向かっていただく予定です』

分隊員を両脇に従えクレツシエは、最後に残しておいたような袖口を片方ずつシルしながら至って丁寧に突きつける。

『クラウナート？』

思わずシャツフルは、繰り返していた。当然だ。その地に覚えのない者はいないだろう。だからこそその場から、後ずさつてゆく。

『わたしの記憶に間違いがなければ、そしてあなたの言い違いでなければ、あの汚染惑星のクラウナートへ、ですか？　そこへ行けと？　そこで強制労働に従事する服役囚たちの面倒を見ると？』

吐き出せばどうして笑いがこみ上げてくるのか自分でも分からず、分からぬ己に不気味さを感じて、シャツフルはその顔をいつも通り、ひとなでした。

狼狽。

そうしてようやく己の感情に気付き、声を低くする。

『あなたは、そこでわたしに、死ねとおっしゃるわけだ』

脳裏に、『カウンスラー』の遺跡前で目にした物乞いの変形した体は過つていった。『それは聞こえの悪い解釈と言うものですよ、中尉。残念ながらこれは降格です』

クレツシエの物言いは、静かが過ぎて事務的を極めている。その冷静さで、これは変更の効かぬ決定事項なのだとも言わしめていた。シャツフルの神経はその口調になお逆立つ。隠し通せるはずなどないなら敵意もあらわと、抗議していた。

『確かに直接出向いたことは、命令違反だ。ですが、アルトの確保についての評価をいただいてもいいはずではないのですか』

ならクレツシエの声は鋭さを増す。

『いいえ。あれは、わたしの管理不行き届きから起きた事件でした。ですからわたしは、今日まであなたにその罪を償うべくポジションを与えてきたのです。評価を知りたいというのなら、あなたは単に自らの招いた惨事の收拾に努めた、それだけに過ぎません。評価したからこそ、あなはクラウナートへ保健員として向かうのです。罪人としてではない』

『……なるほど』

睨み合った。

果てにシャツフルはひとつ、鼻で笑いとぼす。

『あのクーデターを煽ったのはわたしだと、ずいぶん前からお見通しだったというわけですか』

答えるべく言葉を溜め込んだクレツシエの目が、極限にまで細められてゆく。

『あなたはすぐ顔に出る。いつも伝えていたハズです』

拘束の指示は、次の瞬間にも出されかねなかった。

『別体は……、セフポドは安心ならない存在だと思えますがね』

遮るべくシャツフルは、矢継ぎばやと言葉を並べる。

『イルサリを起こすまでの間、奴の志向性にすら矯正をかけることはできない。一体、誰が奴を監視するつもりで？ 同じ合成塩基の研究員に？ それともこの物騒な分隊員たちに？ ご冗談でしょう？ また以前のような騒動が起こりかねない。それでもわたしをここから外してよろしいのですか？』

苦し紛れだということは、己が最もよく理解している。見透かしてクレツシエも、有り余る余裕を見せ付け、細めていた目から力を抜いていた。

『ご忠告、ありがたく頂戴しておきますよ。ですが中尉、あなたにその役割は荷が重過ぎるようです。ご存じないような申し上げておきましょう。セフはスタンエアを所持していました』

それはあまりにも唐突な報告だ。

『なんですと？』

聞かされ、シャツフルは目を見開く。

『極Ｙが見過ごしたとは思えません』

『まさか、奴ら……』

『気づけなかったあなたに、今後も任せられるような役割ではない』

バサリ、切り捨てた。

『ご心配なく。セフの様子はわたしが巡航艇で確認しました。そうですね、あれはあれでいいようにアルトの子守をしてくれるでしょう。それが彼をこの事態に縛り付ける、そして世界を縛り付ける、同胞と同郷の呪縛というもののようです。もちろん事態が落ち着いたあかつきには研究対象としてセフポドは凍結、生成を禁止する予定でもありますから、今後このような失態は二度と起きません。これはわたしにとっても大変興味深い案件となりました』

穏やかに笑った。そこに無邪気さを見たのは錯覚か。シャツフルはたまらず口を開く。

『……なるほど、全てはあなたの思うがまま、というわけですね。それはさぞかし気分のいいことだ』

食らったところでクレツシエの顔色が変わることはない。

『勝手な想像は好ましくありません。わたしの意志は単に、理想の未来を反映したものに過ぎない。個人的な嗜好と混同されては不愉快といわざるを得ませんね。あなたが求めた個人の利益は、わたしに存在しないのです』

それこそ傲慢な物言いというものだ。だがしかしクレツシエに疑う様子はない。

『あの事件で、そうしたものを手にしようとしたあなたとは、違います』

言い切つてさえみせる。ならそこにあるのは、決して理解しあえない他者だった。

『……違い？ ですか』

のぞき込み、シャツフルは繰り返す。

当てられればまるで新しい白衣へウィルスのシミが広がるといわんばかり、クレツシエはその視線を断ち切った。全ての話が終了したことを告げシャツフルへ背を向ける。持ち上げた手のひらを、払いのけるように宙で翻した。合図に分隊員たちは動き出す。だがいくら指示とはいえ、いまさら粗暴な態度に出ることがはばかられる様子だ。静々とシャツフルの周りを取り囲んでいった。

『中尉、お静かに。このまま我々と同行願いたい』

分隊長だ。低い声で促す。響きはむしろ、遠慮がちですらあった。シャツフルは曲がらぬ口元で、そんな分隊長へどうにか笑い返してみせる。

『奴がスタンエアを持っていただと？』

確認した。

『らしい。回収したものは、わたしが預かっている』

あいだにも、近づいた分隊員がシャツフルの右に左に立った。拘束しようと、小脇に構えた銃口より前へ、その手を伸ばす。

『ならば、大事に……』

それは右側の分隊員の手が、シャツフルの脇をくぐり腕をとらえようとした瞬間だ。『持つておいてもらおう！』

言い放つや否や、シャツフルは力の限り分隊員の腕を脇へ挟み込んだ。屈みこむように体ごとひねれば、関節の外れるゴクリ、とした手ごたえが伝わってくる。分隊員からくぐもった悲鳴は上がり、そのまま崩れ落ちていったなら、すかさずシャツフルはそんな分隊員からショットガンを奪い取る。

『何をッ！』

分隊長のかすれた声が飛ぶ。

あらぬ方向に曲がった肘を押さえて分隊員が、シャツフルの右側に転がった。すかさず左側に立つ分隊員が、シャツフルの肩へ掴みかかる。

張ったヒジで振り払っていた。続けさまショットガンの銃床を、その喉元めがけて

叩き込む。引き戻すが早いか、トリガーを絞った。真正面に立っていた分隊長の体は見事、吹き飛ぶ。

目の当たりにして、残る二体の分隊員らがミラー効果を有効にしていた。

透けた体に視界は開け、立ちすくむクレツシエの姿がシャツフルの目に映る。

迷うことなくシャツフルは、マガジンパックのキャブを解放していた。ダイラタンシーベレットの濃度を最高にまで引き上げると、トリガー脇の金具を弾く。引き金を絞れば連射モードへ切り替えられた銃口から、軽い音と共にダイラタンシーベレットは矢継ぎ早と吐き出されていった。

が、クレツシエへ届くことなく、弾道は空で途切れる。

遮り、そこに吹き飛び宙を舞う分隊員は姿を現した。

『くそ！』

どうつと床へ落ちれば、顔面を引きつらせたクレツシエと目と目は合う。

瞬間、シャツフルを衝撃が襲った。

足だ。

払われ、前のめりと倒れ込む。見れば右股にダイラタンシーベレットの弾痕が張り付いていた。寸断された筋肉繊維が悲鳴を上げ、すかさずどこから撃たれたのかを見

定めシャッフルは血眼で頭を振る。だがミラー効果のせいで判然とせず、これ以上の被弾は死活問題であつたなら、避け、のたうつようにして床の上で寝返つた。身を起こそうとしている分隊長の元へ移動し、力の限り覆いかぶさる。そんなシャッフルへ振り返ろうと身をよじる分隊長を制して喉元へ腕を回し、盾と場で抱え起こした。『中尉、バカなことを……！』

『ならばおとなしくクラウナートへ行けと？』

分隊長は絞り出し、シャッフルはつき返す。同時に、分隊長の握るショットガンを、自らのショットガンで払い落とした。

『ここは船だ。逃げ場など、ない』

言われようともし態はもう、引けるものではなくなっている。シャッフルはそんな分隊長へ、体を預ける格好で立ち上がっていった。

『逃げるつもりなど、ない』

くまなく周囲へ、同様に腰を浮かした分隊長へ銃口を突きつけつつ、ドアへ後ずさる。

『では何を？』

尋ねる分隊長の声は固い。紛れるように、外れかけていた喉元の集音マイクを押さ

えつけました。

『それは、わたしが部屋を出てからにしておらおう』

見逃さず、シャツフルは銃口を押し付ける。糸のようなケーブルを、喉元へ回していたもう片方の手で耒り取った。

『中尉、正気か?!』

後ずさった体はもうドア前だ。シャツフルの片足がかかると同時に静かに、開いてゆく。

『無論、正気だ』

ドアをくぐりつつ答えてシャツフルは、分隊長の腰回りを探った。見つけたスタンエアをそこから引き抜く。

『むしろ、今まで気がふれていたのかもしれない』

言って盾に取っていた分隊長の体を、力任せと室内へ突き放した。ショットガンを握りなおし、閉まり行くドアの隙間からダイラタンシーベレットを放つ。

解放されてよろめく分隊長が、後方からの乱射に頭を抱え、転がるように身を伏せていた。

ドアは隠してシャツフルの前で閉まり、とどめといわんばかり階級章を読み込ませ

たリーダーへ銃口を持ち上げる。

この慌ただしさは何も、アルトの確保が完了したせいだけではないだろう。『F7』区画中枢であるここプロダクトルームは今、実施が確定的となった極Yへの塩基付加の準備もまた、急ピッチで行われていた。

あえて照明が落とされたルーム内の円卓には、数十名の研究員たちが腰掛けている。中央に浮かび上がっているのは、は緩やかに回転する三本の本口グラム塩基だ。一本は、量産に入る予定のアルト複製塩基本口、もう一本は、塩基付加を行う極Y用の声帯塩基本口である。残る一本はその定着を臨床すべく、併設された処置室にて採取された極Yの純正塩基本口だった。

研究員たちは巨大な織物を編み進めてゆくかのごとくそれら分析に没頭し、解説が進められるに従い本口グラム塩基へは次から次にタグが貼りつけられている。まさに研究員らの頭上、茂る巨木と本口グラム塩基は形成されつつあった。

さらにここへもう一本、滅菌ゲルシンダーより入るはずのアルトのオリジナル塩基が加わる予定だったが、まだ届いてはいない。何か不手際でもあったのか。トパール

はアクリル窓越しに見上げ、隣り合うここ処置室で同様に、しかしながら啞然とアゴを持ち上げホログラム塩基を眺める極Ｙたちへ振り返った。

『現在、付加用塩基の調整中です』

互いの間には、足つきのプラットボードが置かている。

（えらいたいそうな設備やの）

名前をテンと聞かされていた。極Ｙが腕を振っている。

（体質どころか造りそのものを変化させるのですから……、そう簡単では……）

並んで立つもう一体が、不安げにその腕を揺らしていた。名前はメジャーだ。

つまりテンがカウンスラーの音窟より船へ帰したのは、クロマだった。振られて咄嗟に同行できぬことへ不愉快な表情を向けたクロマだったが、そう指示を出したのも万が一の事態が発生した場合、クロマなら自分に代わって船と部下たちを動かすことができるだろうと考えての、テンの選択であることに間違いはない。

（安定性を確認するとおっしゃっていましたが、危険はないのですか？）

メジャーが動作を強め、トパールへ問いかける。訳された動話を見て取りトパールは、プラットボードへその口を開いた。

『百パーセントないとは言い切れません。いくら塩基付加の実績を積もうとも、あく

までも極Y種族への付加はこれがファーストトライとなります。不慮の事態が起らないという約束はできません』

なぞってボード上、トニツクの映像が揺れ動く。目で追ったメジャーが、やおら最初の付加を名乗って出た背後の一体へ振り返ってみせた。

（大丈夫やつて。心配することあらへんがな。ワシ、アタマはあかんけど、体だけは自信あんねんから）

ラバースーツを脱いだ一体はすでに、頭部だけを刳り貫いた処置着に着替えている。筋の通らぬ強がりだが、メジャーには歯がゆかった。見て取ったテンも指を折る。

（すまんの。えらい役目、任せてもうて）

（やめてくださいよ、ボス。せやからゆうて、ワシが音声言語使える極Yの一番手になったからいうて、後で文句言わんといってくださいよ）

放たれた動話が、困ったようにねじれて空を切っていた。思わず笑いは漏れて、テンはただうなずき返す。

『予定通りなら八〇〇〇〇秒コンド以内にも結果は出るでしょう』

途切れた動話の合間を見計らい、トパールは教えた。と、そんなトパールの耳元に、プロダクトルームからの通信は飛び込んで来る。

『極Y用合成付加塩基の生成が終了。投与前の最終確認をお願いいたします』

片耳に掛けられた受信装置よりマイクを引き出すと同時にトパルはプラットボード前から退き、手短に告げる。

『変更なし。初期代謝スピードは七八〇〇セコンドに設定のこと』

『七八〇〇〇、了解。処置実施までは九六〇セコンドの見通しです』

『了解』

聞き取れずとも事態が動き出したことを感じ取ったか、息を詰めて極Yらがその横顔を凝視していた。刺さるような視線を十二分に感じ取りつつトパルは、再びプラットボードの前へ進み出る。

『お待たせいたしました。もうまもなく処置を開始いたします。付加を受けられる方はこちらのベッドへ、他の方はわたしが案内いたします別室への移動をお願いいたします』

(なんや、俺らは一緒におられへんのか?)

突然の部外者扱いに、テンが眉間を寄せた。しかしトパルに慌てる様子はない。『音窟でも申し上げた通り、この技術は我々連邦ラボのみの有する特別なものです。たとえばそちらには盗み取るだけの容量がないとしても、公開することはできません』

痛烈な皮肉さえこめると、突き返してみせる。浴びせられたテンの動きは、そこで止まっていた。時間を惜しみ、トパルは付加対象者をベッドへ促す。

（ほな、ボス。向こうでまっとつて下さい）

覚悟を決めたように、部下がきびすを返していた。

（……おう）

見送ってテンたちも身をひるがえす。

別室へ案内すべく、トパルが処置室の扉をスライドさせて待っていた。

入れ替わるようにして機材を乗せたエアフロートのストレッチャーが、白衣の数人に押されて処置室へ入ってくる。テンは自然、そんな一団へ険しい視線を投げていた。ひきつけ、トパルがジェスチャーでもってしてプロダクトルームとは逆の方向を指し示す。

トパルとテンたちは連れ立ち歩いた。

ウィルスカーテンを一枚、潜る。

どうやらずいぶんセキュリティが嚴重な場所らしい。ウィルスカーテンのノズルに高熱照射タイプのものが据えられているを、テンはチラリ、うかがい見る。

そのまま通路を左へ折れた。

突き当りに取り付けられたドア前の立つ。

スライドしたその向こうに広がるのは、はどこにでもあるような居住モジュールだった。船側に位置するらしい。申し訳程度、割り貫かれた丸窓からわずかながらも殺風景極まる黒い宇宙が見渡せる。ただ明らかにかつては何者かの仕事部屋であったことを示して、取り外せなかったらしい作り付けの大仰なデスクが不本意な位置を陣取ってもいた。

見回しテンは、連邦の要請でプラグを抜いたスパークショットを、その肩から下ろす。

後はご随意にと言わんばかり、案内をつとめたトパルがドアを閉めていた。

ロツクのかけられる僅かな振動が、テンの微小な鼓膜を不穏な音に揺らす。同時によぎる妙な胸騒ぎは、長らく船賊として修羅場を潜ったテンの培った、何ものにも代え難いカンだった。

『クソ、リーダーを破壊されたか』

分隊長は起き上がる。

残る一体の分隊員もミラー効果を解くと、クレツシエの前に立ち塞がる格好で姿を現した。

最高濃度にまで引き上げられたダイラタンシーベレットを食らった分隊員は動かず、腕をはずされた分隊員だけが、いまだ途切れ途切れとうめいて床をのたうっている。

取り急ぎ分隊長は閉まりきったドアへ駆け寄り手を添えた。だが予想通りと、ドアはびくともしない。奥にクレツシエ専用の合成塩基デザインルームを備えたここは最重要機密区画、プロダクトルームとハブAIことイルサリが構成するラボ最深部だ。他に余計な出入り口などあるはずもなかった。

分隊長はクレツシエへ振り返る。

『待機中の隊員に追跡させます』

呼びかけに、クレツシエは我を取り戻したようだ。張り詰めた緊張にのんだままの息を、腹の底から吐き出してゆく。

『勝手な世迷言に付き合うのは、もうたくさんです。結構。本艦からの離発着船の監視を強化。所詮、ここから外へ出られる道理などないのです。しかも被弾しているなら、そう動ける身でもないでしょう。同じような失態を繰り返すつもりはありません。慌てて追わずとも確実に追い詰めることを優先させます。ともかく、まずは待機中の

者にここを開けさせるよう指示なさい。全く、わたしの恩義をなんだと勘違いしているか……!」

独り言のように付け加え、スリープさせていた仮想デスクを再起動させた。なら浮かび上がったデスクへ二重螺旋の塩基は灯り、続けさまプロダクトルームの進行状況を伝えてメールが滑り込んでくる。動揺の欠片も見せずにすくい取ったクレッシエは、軽快な手つきでそれを展開していった。

それ以上、見向きもしないクレッシエに答えて返す間合いを失い、分隊長はシャツフルに塗り取られた無線機代わり、介抱につとめる分隊員へ外部に連絡を取るようアゴを振る。陰鬱な気持ちは、仕事であればこそ割り切れるモノだろう。出ないなら、と考えその目を細めていった。

そんな部屋を後にしたシャツフルは、目の前のドアがスライドするや否や、いつもならありえないだろう警戒ぶりで辺りを見回す。だが研究員たちは、ここプロダクトルーム中央にそびえ立つ樹を取り囲んだきり、一心不乱と作業へ没頭すると誰もシャツフルに気づきさえしなかった。つまりまだ何も知られていないのだ。シャツフルは

見て取る。

スタンエアを懷に、痛む足を隠して精一杯、背筋を伸ばした。舐めるように見回していた視線をプロダクトルーム奥、生成された塩基保冷库へ投げる。めざして歩き始めた時だった。その背に声はかけられる。

『あ、シャツフル軍医、お戻りでしたか』

振り向けばそこに研究員は立っていた。あまり覚えのないその顔は、事件以来に合成された有機体だろう。取り繕うでもなくシャツフルは、純粹に確認して口を開く。

『段取り通り、いつているな』

『はい』

『トパルはどこへ行つた？』

『処置室で説明を……』

答え研究員が、右手壁面にはめ込まれた窓の向こうへ視線を飛ばす。だがそこにトパルの影はない。代わりに、ベッドに横たわた処置着の極Yと、塩基負荷用の周辺機材を手際よく準備してゆく研究員二体が見えていた。

『ああ、どうやら他の極Yを別室へ案内しているようですね。お急ぎの用件でしょうか？』

『いや、かまわん。分かった、仕事へ戻ってくれ』

シャツフルは首を振って返す。何、疑問を抱くことなく一礼した研究員は、目指す保冷库とは真逆の方向へ立ち去っていった。見送りシャツフルは、思うように動かぬ足を繰り出す。改め保冷库へと向かった。

扉を押し開け中へ潜り込む。

そこには細い通路が一本きり、伸びていた。独特の湿気を伴う二オイが充満し、閉めた扉にプロダクトルームの喧騒は遠のくと、保冷库のエアダクトから漏れるガス音だけが、呼吸にも似たりズムでもってして辺りにこだまし始める。

シャツフルは健常を装う必要のなくなった体で、立ち並ぶ嚴重極まるウイルスカーテンを壁伝いに幾重もくぐり抜けた。

果てに現れた、霜の付着した保冷库扉のキーパネルを弾く。

アクセスコードは生きていたらしい。扉周囲へ三重に敷かれた物理ロックが響かせ、物々しくも豪快な解除音を耳にしていた。

扉脇に掛けられていた防寒コートを取る。袖を通せば扉が足元へ吸い込まれていった。やおら中から白く冷氣は溢れ出し、同時に灯る作業灯が、その向こうで稲妻のよう瞬くのを、シャツフルは見る。

片足を引きずり冷気を裂いて、シャツフルは保冷库内へ足を踏み入れた。ややもすればラベリングされた生成前の塩基に細胞が、ホロタグを添付した状態で目の前にズラリ並ぶ。傍らで、それら数の多さを考慮して据えられた検索用の端末が、ぼんやり光を放っていた。だが今、そんな端末には必要はない。

シャツフルは直接、目当ての棚へ向かう。

それは手前から四つ目だった。頻繁に使用するため目の高さに場所をとった代謝促進媒体は、有機体の生成時、時間短縮、または調整をかねて使用する薬液である。

手に取り防寒着の内側、軍服のポケットへシャツフルはそれを落とし込んだ。しばし休息さえ取ることができれば、ダイラタンシーレットによつて受けたダメージを素早く回復させることができるはずだ、と考える。あとはその時間を捻出すべく、身を隠す場所を探すのみだった。吐き出す白い息をまとい、シャツフルはひとたび保冷库の外を目指す。

磁気鍵のコイルへかけられてゆく電圧が、鈍い音を立てていた。

解除は外部からのみ。ネオンが目覚めたとしても、外へ出ることはかなわない。

今はそれでいいと、アルトは思っている。そしてまだ中身が半分近く残る薬剤を処分すべく、プロダクトルームに並ぶ処置室近く、通路をオフィスへ向かった。

ついに極Yの塩基負荷が始まったのだらう。目指すオフィスから、塩基負荷用の周辺機材を乗せたエアフロートのストレッチャを押した白衣たちが出てくる。それほど広くもない通路ですれ違い、入れ替わりでアルトはオフィスへ入っていた。

他者の姿はない。

吊るされていた薬剤を、ダストシュートへ落とし込む。用のなくなった支柱の止め具を緩め、折りたたんで同じ機材の並ぶ棚へ押し込んだ。一息つき、辺りを見回す。

塩基負荷用の周辺機材はまだ四セット、部屋の片隅に並べられていた。使用される薬剤はその傍ら、古めかしくも手書きの棚に積み上げられおり、下にディスプレイサブル、使い捨ての周辺機材もまたストックされていた。

反対側へと頭を振れば、プロダクトルームが稼働しているせいだ。連動するホロスクリーンが壁を埋めて立ち上がっている。その下方、碁盤の目と仕切られたマス目に、解析の終わった塩基データは一時保存されていた。極Y塩基と付加用声帯塩基、そしてネオンの複製塩基がホロタグを揺らし、収納されているのを目にする。

歩み寄り、アルトはその中の一つ、ネオンの複製塩基タグをつまんだ。ゆっくり手

前へ引き出せば、連なりスクリーンから相当する二重螺旋は姿を現す。目の高さへ掲げ、出来を確かめ手首をひねると、その全体へ目を通していった。

悲しいかなそれは、理解し尽くせるモノとしてアルトの前で淡く光を放ち続け、眺めて走らせる思考は、そんな理解の及ばぬこれからについてだった。

イルサリの自閉解除を拒否し続ければ、ネオンは間違いなく物理解体されてしまうだろう。いや、極Yの塩基負荷が一段落すれば、おそらくラボ総出でそれは始まるはずだった。

逃れるとしてこらボ『F7』は、情報のみならず物理サンプルの収集に伴いひとところに留まることのない医療船、通称『ビアンカ』と呼ばれる白い船の一角にすえられている。生身のまま外へ出ることなどできるはずもなく、艇を出すには船の中核である管制を経て格納庫を解放する必要があった。だとして何一つ準備がない今、力づくなど無謀以外の何物でもない。そしてしくじれば今度こそ、スタンエアを突きつけクレッシェが言い放ったように、その場で全ては終わるに違いなかった。

なら今すぐネオンの元へ戻り、眠る間にも始末をつけるかと考える。だが段取りを巡らせただけで、立ちすくんでもいた。

覚えた恐怖は一瞬で消化される死より寒々しく、耐え難い。諦めることができない

のも、分の悪い戦いを押し通すことも、全てがその恐怖に起因していた。そしてこの世に生まれ落ちた限り、己が己である意識の続くその限り、後戻ることが許されぬ誰もがこの恐怖から解放されることこそありえないだろうと感じ取る。己を己たらしめる、言葉に解けぬからこそ代わりの利かないこの世に一つのそれを、たとえばそれが次の争いの引き金になろうと、やすやすと手放せる者など誰もいないはずだった。

譲れぬ争いの、理解しえぬ隔たりの、潰えぬカラクもおそらくそこにあると考える。だが一方で我を通そうとすればこそ、互いが互いへ理解を強いてきたからこそ、争いながらもこうして世界は可能性を広げてきたのではなからうか。

わずらわしさをかいくぐる。

今、必要なものは、そのせめぎ合いが生み出す「可能性」だ。

必要以上の力をこめ、アルトは再びホロスクリーンへ二重螺旋を押し込んだ。

なら最後まで戦うのみ。

仕掛けるとすれば、もうそこしか手は残されていないと眉間を詰める。

返したきびすで、跳ね除けるようにオフィスのドアを押し開けていた。猛然と二枚のウィスルカーテンをくぐり抜け、あの騒動で内装を変えたラボ内の、見慣れない景色だが慣れ親しんだ距離を今一度、辿る。据えられたクレツシエの部屋を迂回する格

好で右折し、やがて現れた袋小路の、幾度となく出入りしたイルサリリンクルーム、その防磁ドアを開け放った。

音に弾かれ、イルサリの監視を続けていた白衣が驚き、振り返っている。その向こうには、せり出すような格好で露出した球形のイルサリ本体が、変わらず黒々とのぞいていた。基本的に視覚や手作業による操作を必要としないこの部屋にはそれ以外、ホロスクリーンも、それを操作するべく各種端末もありはしない。あるのはメガーソケットと呼ばれる脳磁気読み取り装置が四基、イルサリを背後に並ぶのみに、シンプレを越えた殺風景な場所でもあった。

そんなメガーソケットは、どうやってこの狭い空間へ入れたのかと思うほど高い背もたれがついた、一見するとラグジュアリーな椅子である。だが腰掛ければ頭部があてがわれるだろう部位には、無数の磁気検出コイルが張り巡らされ、すでに三基へ白衣は横たわると、高い背もたれを折り曲げ頭全体を覆い、まるでバケツでもかぶったような見た目でリンク中の体勢をとっていた。

アルトは空いている最後一基へ歩み寄る。

遠慮することなく腰を下ろした。

『何を？ か、勝手なことをされては、困る』

見覚えのないアルトに、振り返ったばかりの一体が慌てて声を張り上げていた。だとして向かえ撃つアルトに、付け入らせるようなスキこそない。

『俺は、コイツを自閉させたセフポドだ。今からコイツの自閉を解く。質問があるのなら、それはクレツシエに確認してくれ』

張り過ぎていた腰あて部分のエアを抜き、埋まりこむようにソケットへもたれかかった。跳ね上げられていた高い背もたれへ手を伸ばし、引き寄せ折り曲げた。閉所恐怖症なら全くもって問題外だろう。背もたれとの間に挟みこむように、頭部を覆って固定する。

合図にメガソケットは起動していた。アルトの耳元で羽虫の飛ぶような細い駆動音は鳴り響き、遠ざかれば閉じたまぶたへ光は投影されると、薄ら白く視界は口を開き始める。

それはまるで澄んだ流れの中を泳ぎ抜けるようなイメージだ。

そうして開いたその先の、裂けてたなびく様はライオンの鬣のようにも見えてならない。

アクセスコードを要求するイルサリがたなびく鬣の中央へ、ゴーサイン代わりのアイコンを点滅させていた。

だとして、感知させる音も打ち込むべく文字も必要ない。

ネオンへ志向性の矯正を施するたび、新たに生まれ変わること祝って唱えた、これはイルサリへのログインコードだ。

アルトはただ胸の内で静かにその言葉を唱える。

ハッピーバースデー アルト 獅子の口は 真実を語る、と。

網膜へと直接投影された映像には、不思議なほど距離感がない。

ログインコードが織りなす脳磁気パターンを読み取り、そこに道は開かれていた。

一気に光が辺りを包み込み、真白となったところで暗転する。

闇の底がバーコードかとまだなら線を引いて白んだかと思うと、裂いて真っ白な球体は浮き上がっていた。アルトの注意を引き付けそれは跳ね回ると、やがて視界の左肩で静止する。右へと滑りながらセフポドのアクセスコードを文字羅列として、視界の中に吐き出していった。遠近感は、そんな文字せいでおぼろげながらも取り戻される。イルサリの仮想空間は、ついにそこへ立ち上がっていた。

パターンを認識

誤差、○、○○ニパーセント

誤差許容範囲内

塩基ナンバー1 セフポド・キシム・プロキシテル クルー34

『約束』発行元

アクセス許可

同時に文字を吐き出した球体が、膨れ上がってゆく。再び辺りを白く塗りつぶしたかと思えば、弾けて中心より飲み込むような黒い空間がアルトの視界を覆っていった。と、イルサリの排気熱量が増したらしい。耳元で羽虫の飛ぶようだった音が、振動伴う重低音に変わる。

おはようございます

連ねられる文字。

あの事件以後、自閉することで音声を封鎖した、それはイルサリの第一声だ。なおかつ時を経ても何変ることのない、状況に応じたいつもの応答だった。一瞬にして過去へ引き戻されたような錯覚にとらわれアルトもまた、力むことなくこう返す。

『そんな時間か』

ならイルサリは、律儀と詳細を告げてよこした。

本艦内共通時刻を『ヒト』の二十四時間基準に換算
現在は午前四時二十九分十一秒です

右下にアナログ時計までもが表示される。

『ありがとう。あちこち引きずり回されたせいで時間の感覚がなくなっていたようだな』

などと順調なイルサリの様子に白衣たちが、アルトの周囲でざわつき始めた。
知ったことかとアルトは、イルサリとのセッションに集中する。

『もうひとつ、お前には礼をいわなければならない』

なんでしょう？

それは賭けだっただけに、感謝の意は嘘偽りのない本物だ。

『約束を果たしてくれた。ありがとう』

しかしあくまでもイルサリは、自らの調子を崩さない。

現在、『約束』はその検証を実行中です

検証の過程において、わたしの意思が仮設定されたことをレポートします

検証終了は、わたしの意志の消滅が確認された地点となります

同時に結果を反映

『約束』の内容の提示如何、また『約束』の実行の是非については、消滅後の予定と
なっています

目を通し、思わずアルトは小さく笑っていた。

『そのせいなのか』

その、とは何をさしているのですか？

『仮設定されたというお前の意思だ』

閉じた瞳で、焼き付けられた網膜上の景色を見回す。

『ここの様子がまるで以前と違っている』

ずいぶん機能が制限されているようだ。遠近感のなさや物理上、不可能な配列を成すためのものだったが、そうまでしてセクションをスムーズに行うべく雑多なアイコンの羅列やコマンド処理が可能ながらも、今、見ての通りここにはほとんど何もない。

『約束』への侵入工策が外部から多発

阻止するため、わたしの『意志』により、遮断

周囲にトラップとバリケードを強化しました

現在、何者の攻撃も受け付けません

『意思、か……』

思わずアルトは声を漏らす。それ以上を飲み込みイルサリへと問いかけた。

『今現在、お前はお前自身を客観的にレポートすることができるか？ イルサリ』

とたん、それまでのやり取りに溜まっていた文字が、消え失せる。まさに悩むような間はそこにあくと、やがて不規則なリズムを刻んで文字は、打ちだされていった。

『約束』を守ることで、わたしはあなたを模倣している、と認知しています

模倣する時間に比例して、わたしは仮設定された意志が、

強化されてゆくことを認知しています

現在、強化された意志に仮はなく、全ての実行は意思の選択により行われている、

と認知しています

ゆえにわたしと意志、すなわちあなたの境界は、現在判別不可能です

『……そうか』

吐き出した。理解できぬとも言えないそれは、アルト自身にも覚えがあるものだ。だからこそその皮肉を感じつつ、アルトはイルサリへこう教えてやることにしていた。

『……わたしがお前の靴になったというわけだ』

靴？

イルサリは即座に問い返してくる。

わたしは、肉体を有していません

主張した。

『そうじゃない。なら思うがままに意思を動かすための最初、ひとつのきっかけだ。その種をわたしがお前へ植え付けたのだ、と言いかえよう。生きとし生けるモノが持ちうる己のルーツであり、ツール（道具）、わたしは今、その話をしている』

もつともな取り違えを、アルトは訂正して言い含めた。なら文脈を解体するイルサリが、勢いよく文字を吐き出してゆく。

ルーツとは、根源を指します

わたしの根源は『あなた』となります

わたしは有機体ではありません

あなたは靴ではありません

『なったのさ、今』

一呼吸おき、アルトは言った。それはずいぶん滑稽だったかもしれないが、真実やもしれなかった。

『そうさ、ハッピーバースデー、イルサリ。お前はここに生まれた。生まれたからこそ、生きてゆかねばならぬモノとなった』

また一段と増した排気熱量に、羽虫の振動がアルトの耳元で騒ぎ立てる。

『そんなお前に指示を出すつもりはもうない』

それは今にも、空へと上がりそうだった。

『かわりに、相談がある』

前にしてアルトは持ちかける。

はい、なんででしょう？ セフポド

答えるイルサリに、指示と相談の違いを問いただす文脈が欠落しているのは単なる気のせいかな。かまうことなくアルトはつづる。

『わたしだけでなく、外部からのアクセスへ道を開いてほしい。かつてのように記憶マーカーの注入や、アルトの脳細胞マツツピングとコピーに手を貸してほしい。ネット全体のブランクを利用できるお前の能力がなければ、物理的に無理な作業だ』

イルサリはしばし黙した。

やがて答えを弾き出す。

それは不可能です

『約束』が検証中である限り、

外部からのアクセスを受け付けることはできません

初めて突きつけられた、それはNOである。だがたじろぐことなくアルトはこうも、
たたみかけた。

『いや、その提示を要求する者はもういない。お前の検証を阻害する者は現れない』
ネオンとアルト本人を手中に収めた今となつては、所在を記しているだろう内容な
ど連邦が必要とするはずもない。

『その安全はわたしが約束する』

言い切っていた。

確認してイルサリは問い返す。

その約束は、あなたの意思の消滅が確認されるまで
検証され続けるものでしょうか？

文脈がややこしいが仕方ないだろう。イルサリはイルサリのやり方で、その約束は
死ぬまで守られるものなのか、と問いかけてくる。

『ああ、損じたりはしないよ』

物わかりがいいのもそのうちだ。真逆とアルトは、あつけないほどの二つ返事でイ

ルサリへ答えて返した。

分かりました

外部アクセスを通常へシフト

自閉モードを解除

防壁を除去します

引き換えに、イルサリは了解する。

とたん空白を埋めて、かつてのアイコンは無数と浮かびあがってくる。重なっているようで手前に奥の曖昧な、かつてのイルサリ仮想空間は淡白なまでの蒼さで蘇っていった。

『全方位オープンまで、六三〇秒コンド』

『おはようございます』

『わたしはイルサリです』

『アクセスコードをどうぞ』

文字が音声に変わっている。

聞いてアルトは頭部を覆っていたメガソケットの背もたれ部分を、跳ね上げる。

『いや、たとえその不可侵領域へ踏み込もうとする者が現れたとしても、お前もまた闘うまでさ』

吐いて、軽くうめき立ち上がった。

隣では依然と白衣がリンクを続けている。残る白衣らは、自閉を解いたイルサリの様子にかぶりつかんばかり端末の波形を観察していた。そのうちの一体がアルトへ素っ頓狂な顔で振り返ってみせる。あの事件の後、生成された有機体だろう。アルトはその顔に覚えがなかった。向けてただ、肩をすくめて返す。その首を、再びイルサリへとひねった。そこにイルサリの筐体は、変わらずふてぶてしげにせり出している。見上げたアルトはただ呟いていた。

『……俺たちのように、な』

（もう処置は済んだのでしょうか？）

案内された部屋でメジャーが、心配げに手を振っていた。だがフレキシブルソファに腰かけ四本の腕を組んだテンが、答えて返す様子はない。

部屋はありきたりな外装だったが、その実、それこそ見せかけのように、テンの船以上の装備でもってして過ぎるほどに快適な環境を提供し続けていた。室温を一定に保つべく、壁にはサーモペーパーが貼られ、船によくある金属臭さや使用していた有機体特有の体臭と呼ばれる発酵臭は残っておらず、晒され続ければひそかなストレスとなる船の駆動さえもシャットアウトされると代わりに微かと流れるBGMが、テンたちへ半ば強制的に沈静さえ促していた。

（なんや、エエとこでんなあ）

飲まれてフレキシブルソファへ身を横たえた一体が、メジャーの隣で指を折る。

チラリ横目で見てとったメジャーが、困ったような表情を浮かべてみせた。

（ハラもすいてきたんなら、なんか食わしてくれんのやろか）

これは使い物にならないと、その視線をもう一度テンへ据えなおす。覗き込み、テンの動きを待った。だがテンは置物かと思まごうばかり微動だにしない。様子に珍しくも、痺れを切らしたように腕を振ってみせた

（テン、先ほどからあなたが何を考えているのか、おおよそ予想はついているつもりです。ですがちゃんと振ってもらわなくては、分からないではありませんか？）
それは、あえてテンの視界を遮るような動話だ。

（……これは）

指を折り、仕方なく絡めていた腕をテンは解く。ためらった後、綴った。

（実験と、ちゃうんか？）

（え？）

メジャーにとって、それが意外であったことは否めない。

（実験？）

繰り返していた。

と、ついにその隣でm寝そべっていた一体は眠りに落ちてしまったらしい。間拔けた鼻笛が、規則正しいリズムを刻んで聞こえ出す。

（そういうことやろ）

聞こえぬかのようにテンは動話を続けていた。

（あいつ、言いおったな）

そこにいつものキレは戻り始める。

（処置は百パーセントやないと。おかしいやないか。俺らは百パーセント仕事をこなした。これは取引やぞ。せやのにその見返りは、そんなもんでええのか？ 俺らを何やと思うとるんや？ やのに、そんな奴らへ俺はあいつを預けてもうた。もしあいつに万が一のことがあつたら、俺は他の奴らに合わせる顔がない。せやろ？ あいつがあかんかったらいうて、また誰か別の奴に行つてこい、言うんか？ まさか、どうなるか分からんモンに俺が出てゆくこともでけへん。それこそ何かあつたら、後に残された奴らが不憫や）

行き場をなくしたその手が宙をさ迷う。やがてフレキシブルソファへ埋まつていった。

つなぎ止める振りを見つけられずメジャーもまた、眉間を詰める。

前においてテンは再び、その手を持ち上げた。

（あいつの振つた通りかもしれん）

それは独り言のような動話だ。

（あいつ？ とは？）

メジャーは振り返っていた。ならメジャーの顔をうかがうテンは、まるでイタズラがばれた子供となる。

（確保した『ヒト』や。男の方のな。カウンスラーへ向かう途中、ゲージの中で俺はあいつと動話を交わした）

（動話を？ それほど使えるのですか？ あの『ヒト』は？）

（せや。なんや、ここの研究なんかで動話を担当しとったらしい。十分通じる動話をつかいよる）

（その彼が、あなたになんと？）

驚き開いた眉間を寄せて、吸い付くフレキシブルソファの上で身をよじると、メジャーはじれったそうにテンへ詰め寄った。

（あいつが振るには、俺らは利用されとるだけや、と。連邦の思うままになれば、それこそ俺らの意思はとらへんともな……。そうなれば俺はきつと後悔するともぬかしおった。そんな俺らの立場は似とつて、互いに大事なモノを守るため奔走しとるだけやともな。あのとき俺はてつきり奴が命乞いでも、見逃してくれとでも訴えとるのかと思とったんや。違うと分かったところで引き返す価値もないと、俺は信じとった。

せやけど、そうやない。何かがおかしい。こんなはずやなかった)

と、しゃつくりの音がする。メジャーの隣で眠る一体だ。フレキシブルソファを窪ませもそもそ、寝返りを打っていた。どうにも話の腰を折られたようで、テンは素っ頓狂な視線を向ける。知る由もなくそこで一体は、寝言に肩を揺すっていた。様子に思わずテンは頬を緩める。困ったような情けないようなその笑みで、メジャーへこう指を折った。

(これは、俺のミスや)

似合わぬ振りにメジャーが慌てたことは言うまでもない。

(まだ塩基負荷というものが、失敗したと決まったわけではありませんよ、テン)

(いや、かもしれないという地点で、もう取り返しのつかん所へきとる)

振ったテンが、眠る一体から顔を上げた。

(こいつらを助けられると気取った俺が、アホやった)

放つと宙を仰ぐ。

(テン……)

バツの悪さを断ち切りテンは、やおらフレキシブルソファから立ち上がった。背後の調理台へ勢いよくきびすを返す。

調理台には電熱コイルもむき出しの、一口コンロと電磁調理器が数種類、スペースを惜しむようにきっちり積み上げられていた。下には至れり尽くせりと、保存庫と思わしきステンレス製の扉もまた備え付けられている。

（あの塩基負荷が成功しようがしまいが、俺はこの取引を諦めようと思うてる）

背中越しに上二本の腕でテンは放つと、下の手で保存庫の扉を開けた。屈んで中を覗きこみ、もう一本の腕で電磁調理器もまた開く。保存庫にはちようと、極Ｙ郷土料理のミールパックが入っていた。選んでテンはそこから二つを取り出す。絡まりそうな腕から腕へミールパックをリレーさせ、電磁調理器へ放り込んだ。

（勝手やと思うのは、よう分かつてる。俺がみんなを巻き込んだんや。連邦がトニツクの動話を使ったからや、なんて言い訳はせえへん。それこもれも全部、奴らは信用ならんちゆうことが、ようやく分かったんや。胸が痛んで初めて分かったんや。俺たちは俺たちが生き残る術をもう一度、連邦抜きで考えなおさなあかん。大事なモンを捨ててまで奴らに擦り寄ったところで、それは極Ｙ民族が極Ｙ民族として消滅してゆくよりも、たちが悪いちゆうことがようやく分かったんや）

振り終えたその手で、電磁調理器の扉を閉めた。こもった音が響き、至極単純な操作ボタンをひとつ、テンは押し込む。電磁調理機内にオレン色の光は灯ると、背にテ

ンはメジャーへと振り返った。

（今さら何をいうとんねんと、笑いたいんやつたら笑ってくれ）

あけつぴろげな様に、むしろメジャーは目を奪われる。

（それとも愛想が尽きたゆうんなら、お前はお前の好きなようにしたらええ。他のやつらもみんなそうや）

さらしてテンは促した。

（せやけど、このカタだけは、きっちりつける）

頑なな振りが、そのときばかりは鋭さを増す。

押されて取り戻したものがあるとすれば、そんなテンに見入っていたメジャーの我、だろう。だがそんなメジャーがテンを責めることはなかった。テンの期待に応えて笑い出すようなこともまた、だ。

（わたしたちは……）

ただ静かに、その指先で空を撫ぜる。

（……わたしたちは、テン）

それは自らに言い聞かせるようであり、何者かに操られているような動話だった。（居場所を求めて、遠いところへ来すぎてしまったのかもしれないね）

つづる。

(……そうかも、知れへんな)

忘れていたようなその振りに、テンは答えてしばし黙した。ままに、申し訳程度に取り付けられた小窓へ視線を投げる。そこに黒い宇宙は広がると、強いられた緊張に瞬きを忘れ、張りつく無数の星がのぞいていた。

極Yは極Yでしかない。

(なんや、見うしのうとつたみたいや)

返せば、やおらメジャーが勢いよく腕を振り上げる。

(なら、帰りましょう！ 故郷へ！)

その大胆な動きが、テンの目を奪った。

(それが一番ですよ。遠回りをしましたが、それでいいではないですか！ もういちど出直しです！ 心配しないで下さい。みんなも同意してくれるハズです。だからこんなにも遠くまで、あなたについてきた。わたしたちは目的をひとつに、同じ釜の飯を食らった流浪の極Y船賊ではないですか。より良い未来のためなら、賛成しても憤るものなどいやしませんよ)

嬉々として綴り切る。

(……そう、やろか)

テンが戸惑えば、メジャーはさらに淀むことなく、こう振つてもみせていた。

(なぜなら、それこそが、わたしたちらしい！ そうではありませんか？)

それは理屈が通っているようで、まるで根拠のない自信だろう。見せつけられたなら、テンはたまらず笑い出す。

(俺たち、らしい、か。メジャー、お前に励まされると、どうして、こうもその氣になれるもんかいな)

と、背後で、不意に電磁調理器が調理の終了を知らせた。甲高い鈴の音はひとつ鳴って、程よく温まったミールパックを、テンは中から引つ張り出す。

(ようし、決まったんやつたら、とにかくハラごしらえや)

パックに付属されたスプーンを引き剥がしつつ、フレキシブルソファへ戻った。メジャーへ手渡せば、辺りにはたちまち形容しがたい満足のにおいが満ちる。おかげで夢うつつに溺れていた一体も、目を覚ましたようだ。寝ぼけまなこで身を起こし始める。

(なんや、エエにおいが……)

と、目にしたものに火が点いたかのごとく動話を振った。

（あー、ボスウ！ ひどいわ。や、メジャーも！ 勝手に自分らだけエエもん食べて！）

などと、テンがスプーンですくい上げている淡いピンクの団子は、極Y地方ゆかりの食材、（マトペー）のフライだ。スープに浸されたその半分は、見ればヨダレが止まらぬほどに照っていた。

（食ったら、帰るぞ）

止まることなく（マトペ）を口へ運びながら無造作に、テンはそんな一体へ動話を綴る。

（え？）

読んだ動きが止まっていた。

（なん、なに、て？）

しどろもどろと問い返す。ならすかさずそれが役目と、メジャーが振って付け加えた。

（自分の分は調理台であつたためてください。食べ終わったら、ここを出る準備にかかります。この少人数ですから、タフな仕事になりますよ）

（い、いつの間に？ あの付加なんちゃらは？）

かき込むようなテンの食事スピードは早い。すでに食器の中の半分を平らげている（すまんの。お前らをこれ以上、危険な目に合わせるわけにいかへんのや。あの話はなかったことにする。極Ｙのこれからは、また一から考え直すつもりや）

最後にスープを喉へ一気に流し込んだ。カラになった食器をテンは、床へ放り投げる。見て取った一体が、食いつばぐれまいと慌てて調理台へ転がり込んでいった。

（それから、どうしても確かめておきたいことがあるんや）

見送り、げふつと、テンはひとつゲップを吐き出しながらメジャーへ振る。視界の端に捉えてメジャーが、順調に処理しつつあった食器の中から目だけをテンへ、持ち上げた。向かってテンは前かがみの姿勢を取ると、そつと伝えて指を折る。

（俺らだけが、トンスラするワケにはゆかへんやろ。教えたんはあいつや。あの『ヒト』がどうなつとるんか、俺はどうしても知っておきたい、思うとる）

保冷庫から抜き取った代謝促進媒体が自然解凍するまで、今しばらく。

デイスポースابل（使い捨て）注射器と促進媒体の容器に合うバイオゲージをひとつと、投与中の激しい酵素分解に相当量のエネルギーが必要となることを見越して糖

と電解質の輸液セットをニパック、シャツフルは立ち寄ったオフィスよりさらに持ち出す。身の回りに分散してかくまい、痛む足をなだめすかしてラボの外を目指した。

分隊員はまだ相当数この船に乗り合わせているハズだというのに、そんなシャツフルを追いかけて来る気配はない。警報はおろか、出入りを遮断すべくウィルスカーテンさえ、照射レベルを上げはしなかった。

そこにシャツフルは、クレツシエのあからさまな狙いを読み取る。ここは閉鎖空間だ。どうせ逃げ切れはしない。たかをくくっているに違いないと想像した。しかも待ちに待ったアルトが連れ戻されたところでもある。下手に騒ぎを起こし、遅れに遅れた計画へさらに水を差すような真似こそ避けたいのだろう。その優先順位のつけ方こそいかにもクレツシエらしく、苦笑いすらもれる。

『F7』と外部を分け隔てる隔壁前に立てば、もうすれ違う者はいなくなっていた。普段ならリーダーへ階級章をあてがい隔壁を開放させるところだが、さすがにできない。とはいえ、代わりに使用するコードもまた、知る者が限られた代物だった。だが時間稼ぎくらいにはなるだろう、と手動によるブランクコード入力によって隔壁ロックの解除にかかる。

終われば、跳ね上がる門の音が聞こえていた。

やがて空気は抜け出し、共に隔壁はスライドしてゆく。

同時に独特の熱気を含んで膨張した外気が、胸焼けするほどにシャツフルの前へ吹き込んできた。

開き切るのを待たずして、シャツフルは出来たわずかな隙間からラボの外へと抜け出す。

正面に、下ろされた格納庫のシャッターが立ち塞がる。つい先ほどまで乗っていた巡航艇は、その向こうに停泊しているはずだった。ここが出入りの制限された場所であることを示して左右には、それ以外、何も見当たらない。

シャツフルはシャッターへ擦り寄る。

その脇、勝手口としてに取り付けられた開き戸に触れた。そこに取り付けられている鍵が、古めかしい物理鍵である、ということとはかなり以前から知っている事実だ。確かめ、腰から抜き取ったスタンエアのグリップで二発、叩き落とす。格納庫の中へと足を踏み入れた。

その床を切り取ってひとところ、取り付けられたハッチを踏み込み跳ね上げる。内蔵されていたメンテナンス機材はすぐにも、シャツフルの前へリフトアップされた。目をやることなくシャツフルは、そんなリフトの隙間へ身を屈める。覗き込めば床

下には、暗く大きな空間は広がっていた。他の格納庫とをつないで、電源や燃料の補填装置が通されているダクトだ。

降りるとして、リフトと床の隙間は体を通るかどうかの幅しかなかった。睨んでシヤッフルは、そろりそろりとそこへ体を潜り込ませてゆく。突っかかりそうになったなら息を吐いて身を萎ませた。やがて浮いていた足が筒状となつて横たわる補填装置の感触をとらえなら、頼りにシヤッフルはアゴを上げてどうにか頭までを床下にくぐらせ、手だけをその縁にかけてぶら下がる。そうつとダクトの上へ降り立った。

当然ながら明かりはない。メンテナンスのためリフトアップされているのだらう。各所でリフトアップされたメンテナンスツ機材の隙間から、点々と光は差し込み行く手を照らしている。作業にいそしむそれら格納庫こそ、今も続けられている遺体引き取り作業に伴い、民間船が停泊している格納庫で間違いなかった。

民間スペースへ出ることが出来たなら、安置所は目と鼻の先だ。そこには無数の動かぬ有機体が並べられると、それら有機体を保管すべく資材もまた、数多くストックされていた。紛れ込めば、傷の回復につとめるにはもってこいの環境だと思えてならない。

いくら広い船内とはいえ、長らく詰めていた船だ。身に染みついている構造と距離

感覚を頼りにシャツフルは、暗闇の中をゆつくりと歩き出す。足元を、傍らを、埋めてのたうつケーブルやパイプに注意を払い、翻弄されながら、記憶だけを頼りにただ前進した。

やがてこの辺りで十分か、という場所へ辿りつく。リフトアップされ、あいた隙間から光を投げるメンテナンス機材一式の下で足を止めた。見上げて耳をすませば、聞こえてくるのは充電中の鈍い駆動音と液化混合ガスの注ぎ込まれる圧縮音だけだ。仕事もあるだろうに。フルオートのをそれらを置いて船の持ち主は、仕事へ向かったらしいことを感じ取る。

ならば、とシャツフルは、頭上へ引き上げられている機材の一部へ被弾していない方の足をかける。伸びあがり、どうにか切り取られた床の縁へ手をかけると共に、頭をねじ込み、上体を持ち上げにかかる。

嫌でも被弾した足へ力が入ったなら、自然、漏れ出す声を押さえることはできなくなっていた。その痛み具合からして再トライは難しい。だからこそ意地でも持ち上げた上体、その胸を、格納庫の床へ貼り付けていた。這いつくばり、邪魔としか思えない下半身を力の限り床へ引き上げる。

と、かろうじて尻が、機材の隙間から抜け出した。一気に安定した体をシャツフル

は、前方へ放り出すように投げた。

ヒザまでもが床の上へ乗りあ上げる。

もう大丈夫だ。思えば精根尽き果て、そこでごろり、寝返っていた。

しばし各種機材のぶら下がる天井を見上げ、荒い呼吸を繰り返す。

近寄り、囲む足音は依然として現れる様子がない。

少しばかり視線をずらせば案の定、典型的な装飾をプリントした霊柩船の舳先は見えていた。

幾らか呼吸が落ち着いたところで、体をしならせ立ち上がる。

その足で霊柩船後部にある管制端末へ回り込んだのは、抜け出す前に艦の情報を見とおきたかったからだ。

床から飛び出す格好で据えつけられた管制端末の待機画面を、シャッフルは指で弾く。直近のものから順に、入艦した船のリストはスクロールを始め、数から遺体搬送もいくらかピークを過ぎたらしいことを知った。紛れて流れてゆく字面に、ふと我を取り戻す。

スラー葬儀社。

確かに今しがた、そう見えた気がしたのだ。そしてその名には何か引かかるものがあった。思い出すべく見直そうと画面を呼び戻す。ならそれは呼び戻された画面上で、フェルマータ葬儀社へ名を変えてはまた思い出したようにスラー葬儀社の名をちらつかせ灯った。見て取ったシャツフルの両目は見開かれてゆく。

そう、引かかるものがあるはずだと思い出す。なぜならスラー葬儀社は、いもしない『ラウア』語カウンセターのネイティブ店員を探しに現れた葬儀社の名だと記憶していた。つまるところそれは、セフポドと何らかつながりがある葬儀社である、ということを思い出す。

とたんシャツフルは、腹の中で暴れはじめた滑稽の気配を感じ取った。堪えることなどできはしない。疲れと痛みと、身の上の混乱にさえもが追い討ちをかけ、次の瞬間、自分でも理解できないほど大声で笑い始める。

何しろ即席なまでにIDを偽造し現れたスラー葬儀社の目的など、セフポド救出以外、考えられなかった。無謀を越えたその行動は、ここがどこなのかを知らぬ無知ぶりを浮き彫りとしていた。

『何者かは知らんが、この程度の小細工で乗り込んでくるなど、クレツシエの前に立

「つことも無理だというしかないな」

吐いて笑いおさめ、管制端末を切る。

最後、鼻で小さく鼻いとぼし、外へと靴先を向けた。
が、止まる足。

痛むからではない。

シャツフルの体は自然、管制端末へとよじれてゆく。

『……全てはクレツシエの思う通り、か』

ぽつり、眩いていた。

と同時に、光る瞳から瞬きは消え去る。やがてゆつくりその口は、不敵な笑みを模すと歪められていった。